

Dora Alonso

一九六一年

EL
AÑO 61

ドーラ・アロンソ



一九六一年

ドーラ・アロンソ

コンラド・ベニテスとマニユエル・アスクンセ、
そして、プラヤ・ヒロンの戦士たちへ

旅

バヤメサ

マグアロ・アバホ

学校

ラバ遣い

アロヨン会議

ギサ

バヤミート

シエラの雨

オロ・デ・ギサ

四月十五日、サンチアゴ

戦闘日誌

旅

全国識字運動がはじまると、担当組織と労働センターは、全国各地の学校での教育支援計画を実施した。そして、「ボヘミア」誌のほか、シエラマエストラ山麓のサンフランシスコ・デアロヨンにある雑誌にも計画実施が割り当てられた。

まず、学校や生徒は何を求めているのか、具体的な要求を知るために教員宛に手紙を書いた。すると、数日後にはこんな回答が届いた。

手紙を受け取りました。わたしたちの学校に対し教育支援していただけることに心から感謝します。

手紙は授業中に届きました。ほんとうにびっくりしました。さつそく、生徒に読んで聞かせました。生徒のよろこびも一入^{ひとしお}で、その様子をご覧になったら、きっと感動されることでしょう。

農場の仲間はみなさんが支援にやってこられることを待ち望んでいて、みんな、自分

の家に迎えたいといっています。といっても、食べ物はもちろん、ベッドも十分ではありません。しかし、きちんとお迎えしたいと思いますので、ご安心ください。九十四人の生徒の服も支給してくださること、それぞれのサイズを別便でお知らせします。生徒の体型にもちがいがあって、こちらで用意されているサイズと合わないかも知れませんが、それは我慢します。バヤモ衛生隊とみなさんの協力によって、この辺境の貧しい家庭と子どもたちの悪弊もなくなると確信しています。

こちらでは何もかもが不足しています。こちらも十分な余裕がないかもしれません。が、当座の暮らしに必要なものを送ってくださいるとほんとうにうれしく思います。

サンフランシスコ・デ・アロヨン

一九六一年六月四日

こんな感動的な返事にこたえて、ボエミアの記者は、荒^すんだ学校の生徒たちと貧困家庭を支援するために、さまざまな強化策を考えた。

最初の目的地はバヤモだった。

サンフランシスコ・デ・アロヨンへのルートについては何もわからなかった。バヤメサ地域

の地図にも載っていないかった。「シエラ・マエストラの麓」というだけで、明確な指標もなかった。

旅がはじまつて数時間、バヤモ郊外の大地が姿を現わした。地平線の彼方まで、米作地帯が豊かに広がり、アルガロポ（イナゴマメ）の生い茂った広い原野に、セブ（コブウシ）の群れがグアハカの流れるようなベールに瘤こぶを擦りつけこすている。

よく見ると、シエラ・マエストラが遠くに霞んでいる。サンフランシスコ・デ・アロヨンはどこなんだろう、みんなであれやこれやいい合った。

若い仲間の一人がそんな疑問に応えた。彼は、標高千二百メートルのプンタ・デ・ランサでボランティア教師をしていた。だから、山の中の小さな町から小さな村に至るまで、だれよりもよく知っていた。広いバヤメサを転々としていたらしい。

サン・パブロ・デ・ヤオへは、ブエイシトからラ・ピニユエラを通り、マグアラまで行き、そこで車を捨てて、あとは徒歩か馬で山を登るしかない。

少しずつ伝説の町が近づいてきた。古い教会の鐘楼がわたしたちを出迎え、植民地時代の風景をそのままに、街並みがブレスレットのようにわたしたちを包み込む。

ここはバヤモだ。

高い格子窓が続く狭い路地を行くと、「自由か死か」、あの記憶が脳裏をかすめ、濡れた石畳に、暗くドームの影が落ちていく。
バヤモは雨の中だった。

バヤメサ

いま、バヤモは過去に生きている。

夜というのに月もなく、どの家も、ドアも雨戸もわずかに細く隙間を残して閉ざしたまま。パティオは、草木の名前も匂いも忘れ去られたように、痛々しく息を潜めて^{ひそ}いる。雨のそぼ降る路地には人影もなく、ただ静寂だけがしんしんとかすかに音を立てている。

わたしたちの車は自動車運転者協会所有の九十六台のうちの一台で、ドアには花束の絵が描かれている。グラン・ファンシートという名前もあって、寂しい霧雨にもめげず、わずかな灯りに鉛色に光る街路を、軽やかに駆けるように進む。

通りを行くと、一軒の家に窓が開かっていた。カーペットの広い部屋、アップライト・ピアノが見え、シックなニス塗りの高い梁からクリスタルのシャンデリアが美しい。古き良きキューバのけしきだが、団欒の一時らしく、ラジオなのかテレビなのか、がやがやと場違いのポリウムが、伝統の暮らしを台無しにしている。

さらに進むと、街外れにうらびれた路地が現われた。向かい合う家並の庇が肩をかすめるよ

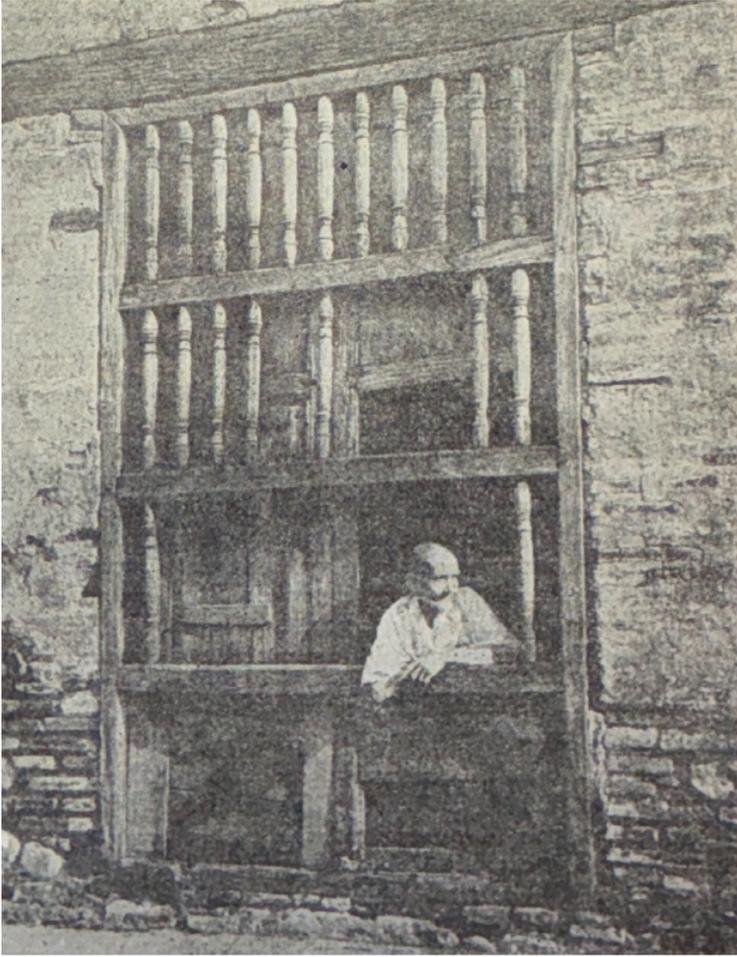
うな狭い路地で、入り口はどこも錆びついたシャッターが下りたまま、窓も古びて鉄格子も錆びついて毀れんばかり。もうどれくらいそうしているのか、家人の貧しい暮らしを匂わせる。庇はもちろん傾いて、門扉にはノッカーもない。貧困と老いが、もう何世紀にもわたって政治の重い軛に沈み込んでいるのだ。

一人の老女が、わたしたちの車列が進むのを皺だらけの好奇の目でじつと見ている。きつとキューバ伝統の家庭療法やシロップ料理に詳しいに違いない。そんな好奇の目に応えて、仲間一人が挨拶した。

彼女の名前は、かつてのキューバらしさを伝えていた。ローラ、つまり、ローラ・アレバロス、八十五歳。ずっとお針子として働いてきた。縫いぐるみ人形はもちろん、指輪をはめ青いスカーフを巻いた人形、そう、豊かな胸、細長い腰、丸い真珠貝の目、赤い糸の口……、だれもが知ってる黒人人形を作り続けた。それを、視力の衰えが奪ってしまった。

けれど、恨み言一つ口にせず、懸命に生きている。

「この家も、もういつ潰れることやら。バヤモでいちばん古いんじゃないかな。ドン・トマス・エストラダ・パルマの借家だね、もう六十年近くも暮らしてますよ。ご覧になりますか、汚いところですけど、さあ、どうぞ、どうぞ……」



ローラ・アレバロス

両開きの、どっしりとしてはいるが、あちこち剥はがれかけた扉を入ると、古い衝立があった。不揃いの石の床板に固定されている。煤けた半円形のアーチに、崩れかけたバラの装飾窓、そして、汚れた壁に、崩れかけたタイルやレンガ、どれもこれもが年代物だ。ひよつとすれば千年も前のものかもしれない土壺は、それらしい威厳を保っている。

さらに、寝室には、それぞれ時代のちがう聖人の版画が三点（アトーチャの子、三人の聖母マリア、そして見捨てられたキリスト）が掛かって、傍には、乾いて飴色に変色した「聖なるグアノ」の花束が飾られていた。

小柄な彼女は、背を丸めてわたしたちを中庭に誘った。回廊の剥がれかけたアーチの下に、赤黒い花をつけた植物が見えた。休眠状態にあるのか、花は力なく垂れ下がり、柔らかな霧雨に濡れていた。

雨樋から、穿うがたれた敷石に零こぼれる雨音に、彼女は憂鬱な心を和ませる。

「わたし、ギーサ生まれなの。ほら、独立戦争のとき、カリスト・ガルシア將軍がやって来て町を焼き払おうとしたでしょ。あのとき、わたしや弟たちをマエストラの麓のカイデイソに連れて行つたの。その話を聞いていただけじゃないかしら」

と、そこに隣人がやって来て、アルカラ・デ・エナーレスのように不用意に、彼女の回想を

中断させた。カタルーニヤのテレサ・グエンはエル・グレコの作品に登場する。冷淡で幽霊のように背の高い彼女は、聖母カルメンの修道服を着ているが、まるでしわくちやの修道会旗のようだ。そして、彼女は眉をひそめ、疑念と険しい目付きでわたしたちをローラから遠ざけ、ローラの紡ぐ回顧の糸を断ち切ってしまった。

新たな光の中で、バヤモは生まれ変わっている。歴史ある教会の鐘の声に目を覚ますと、オルガンが響き渡り、香しい煙が漂う。街を焼き尽くしたあの災禍の痕を残す教会には、マンティラを被り銀とアメジストのロザリオを手にした人たちがいまも集っている。革命は一八六八年のあのときのように、震撼の雄叫びを上げている。

バヤモは配属を待つ識字教師で溢れかえっていた。十一、二歳からの少年が、歩道や公園や、かつての政治指導者たちの豪邸にまで押し寄せている。きょうの朝も十台を超える満員バスがマエストラに出発した。そして、また熱狂的な若者たちを降ろしていった。彼らはランタンと初等教本を手に、ベレー帽を被り、新しいブーツを履き、バックパックを肩に担いで、しゃべったり笑ったり歩き回ったりしている。

地域委員会はバヤモとヒグアニを担当していて、事務所は活気に溢あふれている。すでに百十二の農村学校が開かれ、百十五人の教師がボランティアで働き、七百十四人の識字教師が配属さ



ボランティアの識字教師たち

れている。

郊外の新しい道路や土手沿いには農場や協同組合が次々と生まれ、メロブ・ソサが拷問室として使っていた計量台の近くには、労働者のための集合住宅が建てられている。血に飢えた軍隊の絶滅場は、INRAによって新しい軍隊のキャンプに変わった。この軍隊は、近代的なトラクターやコンバインの使い方を訓練された農業労働者で構成されている。

ショーウインドウには、グアヤベーラを着た白いマネキンと黒いマネキンが並んで立っている。

車や荷馬車が、トラックや作業中のジープの傍そばを通り過ぎ、小さな広場では、保育園児が人形劇を楽しんでいる。その周りで、ユカ・ロスキータやグアバ・トウシートや焼きたてのロスカスが売られている。みんな、エルネステイナ・ギジェン・イ・デ・ラ・オという愛らしい名前の混血

女性が創ったもので、彼女は地域菓子屋の守り神の四人の遣い、アルダマス、カリダ・ピタ、カンデイダ・ブランコ、テオフィラの伝統を受け継いでいる。

太陽が明るく照りつけ、雲一つない。籠かごを背負った我慢強い馬の後ろを、子どもたちに追われてマンゴー売りが通り過ぎる。

かつて、キューバ独立軍のマンビ騎兵隊が、セスペデスやカンブラとともにその前を行進した黒壁には、アメリカ批判のスローガンが書かれていた。

マグアロ・アバホ

バヤモは広大で、シエラ・ネバダまで行ける車はほとんどない。活動は蟻塚のように休みなく、作業も限らないため、ジープやトラックが欠かせない。マグアロ・アバホまでのジープは調子よかったが、学校に届ける荷物を積んだワゴン車はおんぼろで、ハンドル操作がひどく、突然の洪水で道路が遮断されるという最悪の事態に備えて、十分な速度も出せなかった。

小さいながらも目の前いっぱい広がる原野には、野生のジュビアバの灌木がオリーブ畑のように茂っている。灰緑色の葉や幹の枝もオリーブそっくりで、まるでスペインのアンダルシアの田園を行くようだ。

高速道路の最初のジャンクションを出ると、いよいよ高地への旅がはじまった。運転手は、かつて、ブエイシト鉱山で働いていた。だから、ここにサンチェス・モスケラが潜伏し、毎日のように繰り返されていた犯罪について知り抜いている。わずか三年前のことだ。彼は語る。「あたりはまるで墓場のようなだった。クレセンシオ・ペレスのゲリラ部隊がここで活動していることを知りながら、彼らに対抗できないサンチェス・モスケラは、無防備な農民たちにその

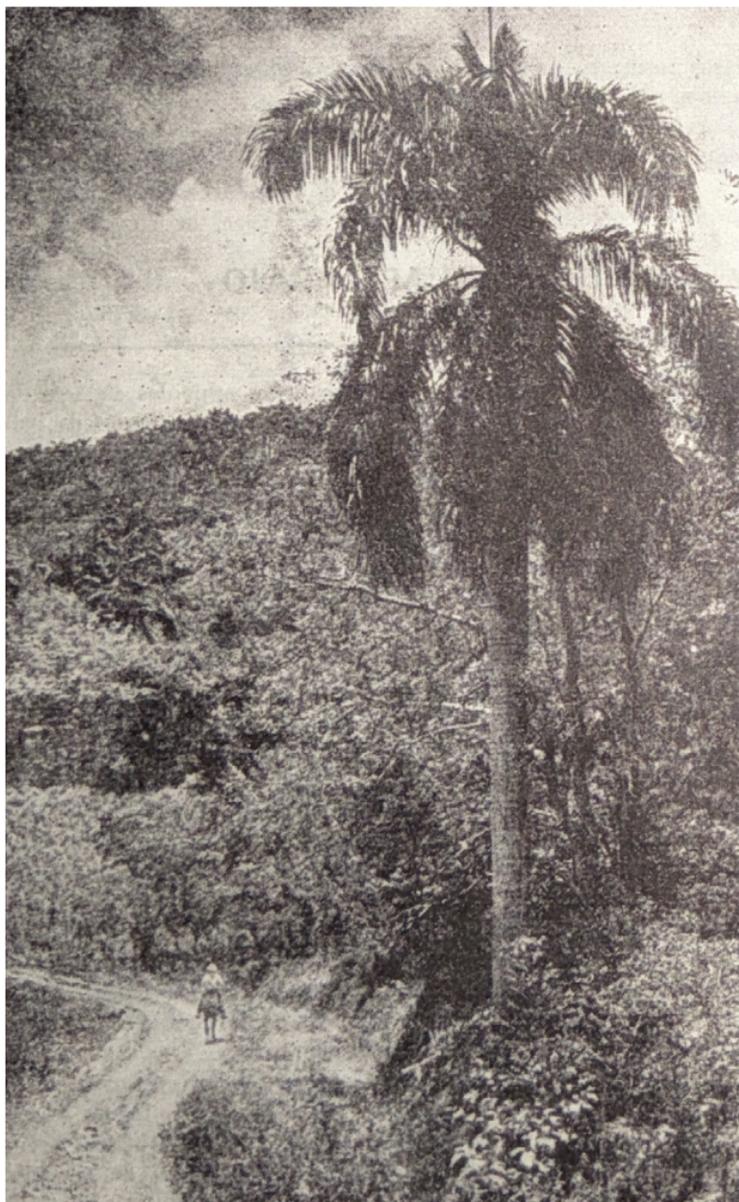
怒りをぶつけたのさ。ほら、見えるだろ。あの柵の脇やヤシの木立の中で、野犬が遺体を齧つたり、ちぎれた足や腕を啜くえて走り回っていたよ」

いま、反乱が成功したその場所で新しい生命いのちが芽生えている。チエが戦いを生き抜いた辺境の小さな村ブエイシトには、いまは電灯が灯っている。ジープが車輪を取られ、ぶつかり、跳ね上がる道路には電柱が立ち並び、車体の側面に「農村電化」のスローガンを掲げたトラックが走っている。

わたしたちはブエイシトの街を出て、迂回路を進んだ。

数カ月前、ブエイ川が氾濫して橋が流された。増水した水が轟音をあげて噴き出し、家を壊してたくさんの死者を出した。鉄橋はコンクリートの橋梁が根こそぎ一キロも下流に押し流された。そして、きょうもブエイ川は荒れ狂っている。大きく波打ち、渦巻き、岸を舐め、木々を押し流している。

陽に灼けて赤錆びた橋を渡ると、もう道はなかった。キューバの土は石灰岩が風化し酸化して赤茶けている。それが濁流となって辺り一面に広がっている。車は大きく揺れ、どこにあるかわからない、隠れた岩に車輪がぶつかり、がたがたと大きな音を立てる。そのたびに車体が傾き、車輪が横滑りして空回りする。そんなことを何度も繰り返して、車は大きく呻うなりながら



果てしない道、ときに馬に乗った農夫が先を行く

濁流を抜けた。

ラス・ピニエラスを過ぎて、サン・パブロ・デ・ヤオに向かう途中だった。傘をさした少女が一人で歩いていて、長くウェーブした髪が陽光に揺られて金色に輝いている。七、八歳くらいだろうか、わたしたちを見つけてにっこりした。そして、また、人気のない椰子の木立の小道を行った。

わたしたちは過渡期を生きている。昨日と今日があちこちで混ざり合って混沌としているが、それは仕方のないことだ。例えば、水桶を積んだ荷車が牛に牽かれる、そんなけしきがなくなるには三年という時間は短すぎる、はずだった。それが、いま、こんなに遠く離れた地方でもソ連製の最新式トラクターが走っている。

サン・パブロ・デ・ヤオは家屋も三、四軒しかない小さな村だが、その一軒の店先には識字運動のポスターが貼ってある。そして、もう一軒の井戸端では、裸足の少年が重そうな釣瓶を引っ張り上げている。か細い腕だが、それでも力いっぱい、ゆっくりロープを引き上げている。丸めた背中の先、首筋の血管は太く膨れ上がっていて、その力の入れようが見てとれる。少年は、先生が彼を探していることを、まだ知らないのだろう。

ブエイシトには牛がいたように、サン・パブロにはヤオがいた。若い男がたくましいラバに

乗り、牛の群れを操って川を渡っている。水面が陽光に煌めいて、向かいの岸边には、樹齢百年は超えるだろう、マンゴーの木がそよ風に揺れ、熟れた実を鳥が突いて遊んでいた。

マグアロはもうすぐだ。あの丘を越えればいい。ジープがヤオ川を渡る。いまにも増水しそうで、エンジンは忙しく呻る。流れる小石を避け、浅瀬をさがして走った。

椰子の木立が風に揺れて柔らかく騒めく。起伏が激しいからか、限りなく時間が長く感じ、一本道も果てしない。

少し進むと、馬に乗った男に出会った。身なりもきちんと糊の利いた服を着て、真新しい帽子を被っている。そして、急いでいるのか、鞍の軋み音も高く、蹄の音を響かせ先を行った。

カーブを曲がると、思いもよらなかった標識が現われた。「マグアロ・ヌエボ水道橋」だった。

現代風の家屋が三十軒ほど並んでいて、庭先にはオオバコ、緋色のアレガニー、紫と白のジュピターが植えられている。かつてのマグアロだったところには、コーヒーの乾燥小屋以外、何も残っていない。周りの景色があまりにも壮大だからか、模型のように小さく見える。

遠くで雷が鳴り、雲が覆いはじめた。乾燥小屋では、雛に囲まれた雌鶏が、こっこ、こっこ、と鳴きながら地面を突いていた。その尾が風に揺れ波打っている。



はじめての手紙

ある夜、マガアロが炎上した。

「サンチェス・モスケラの軍隊がやって来るといっているので、わたしたちは山に逃げました。寝ている子どもを起こし、女たちの手を引き、灯りもない真つ暗な森の中に逃げたんだ。丘の上に立つと、家々が燃えるのが見えた。火は悲鳴を上げているようだった。それから焼け残った家々に物乞いをしながら、親戚や友人を頼りに懸命に生きてきたんです。革命軍はいったんだよ。『戦いが終わったら、新しい町をつくる。新しいマガアロだ』って。その町が、いま、目の前にある。むかしの町とは全然違う。子どもたちの学校もあって、旅団員が先生になってやって来た。わたしの家にも一人息子がいますが、ノートと鉛筆を小脇に走り回っていますよ」

遠くからスコールが追いかけてくる。薄い煙のようだったのが、あつという間にカーテンのようになり、べー

ルになった。雌鶏は蜘蛛の子を散らすように逃げ出し、雛たちは狂ったように鳴き声を上げ、あとを追って戸口に逃げ込んだ。それを母親は翼を広げて抱きしめた。雛たちは母親の絹のように柔らかですべすべの羽の隙間から、不安そうに小さな頭を覗かせている。

「以前、バナナが一房四十セントだったのが、いまは八十セントにもなっている。コーヒーも同じさ。最高級の豆一キンタル(約一・七リットル)が、以前は十八ペソだったのが、いまは三十六ペソ。みんな二倍になっているけど、融資があるのでほんとうに助かっています」

そこに思いがけずマエストロ・アパリシオ(シエラ・マエストラの戦闘員たちを東部の農民たちはこう呼んでいる)がやって来た。畑から歩いてわたしたちを迎えに来たのだ。

サンフランシスコ・デ・アロヨンへは野道しかなく、時間がかかってもそれを行くしかなかった。空はどんよりと曇っている。その下を、水溜まりや流れをもともせず、一列にリュックを背に深い草叢くさむらの中を歩いた。

牛飼いがラバを引いて先導してくれた。その足取りはたしかで地の利もある。その横を青年が学校への贈り物を載せたラバの群れを率いて歩いている。蹄の音に合わせるようにカウベルが爽やかな調べを奏でた。

学校

学校は谷間にひっそりとあつた。小さな灰色の巢のようで、屋根は椰子の葉と芝で葺ふかかっている。旗が風にたなびき、周りには農民の家が点在している。

教師の彼はボランティアでやって来た。もう十一カ月になる。ハバナ生まれの慎ましい生年で、最初は新聞配達をしていたが、その後、その新聞社の事務員として働いていた。

「ライフルを持ってシエラに行くことはできなかったけど、ぼくはぼくなりに闘たたかっているんだ」
いま、学校はまだまだ未熟だが、やがてりっぱに成長するだろうし、それをわたしたちは見届けることになるだろう。

しかし、これまでどんな状態にあつたかということも忘れてはならない。だれもが、文化もなく、無気力で殺伐とした暮らしと、救いようのない苦悩の中に足掻あかいでいた。この学校もいつかは近代的な教育センターになるだろう。しかし、純朴なままの、いまの学校の姿も忘れてはならない。真つ黒に日焼けした少年たちははじめて鉛筆を握った。彼らは奇心旺盛な目を持っている。その意欲と歩みを止めることはないだろう。

人々は何世代にもわたり、基本的人権さえ知らずに生きてきた。本？ 本って何なの？ 医者？ 教師？ それから、未来？ そんなものはどこにあったというのか。

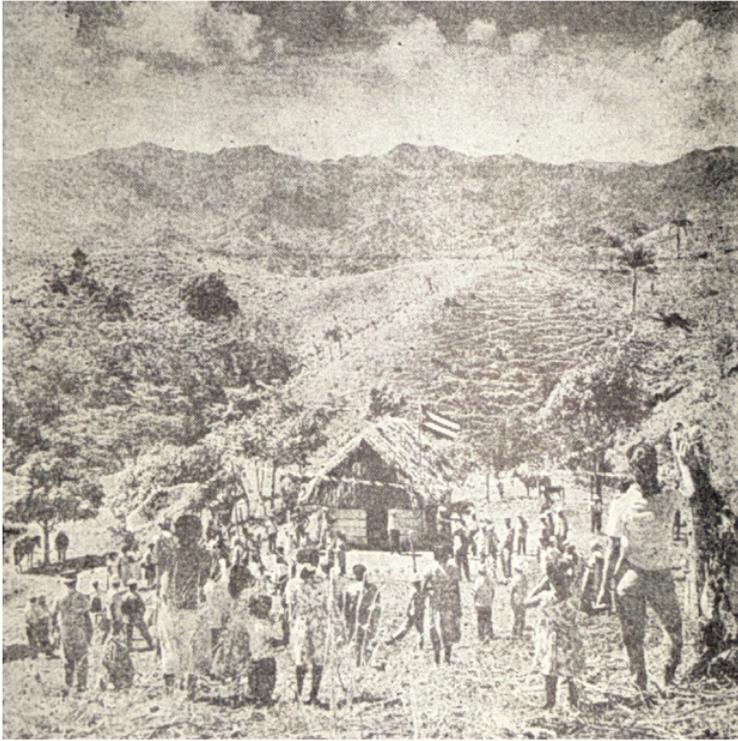
サン・フランシスコ・デ・アロヨン校には六つの窓があつて、四方八方を見渡せる。けれど、ほかにあるのは、木製のベンチと粗末な机だけ。壁は二重の段ボールで、鮮やかなターコイズブルーに塗られているが、校舎は白一色だ。

教室が狭いことはいうまでもない。床は灰を混ぜた白い土間で、壁には、胸にメダルをつけた少年の肖像画が掛かっている。ボランティア教師の学校に通うごくふつうの少年だが、ほかの子どもたちが恥ずかしそうに身を寄せ合い、裸足で継ぎ接ぎだらけのシャツを着て、ひそひそ話もできないのを、彼は感銘したように見つめている。

粗末な木の棚には、本やノートや雑誌がきちんと並べられ、できたばかりの自然史博物館には、蝶やカタツムリに、トカゲやホタルが蒐集されている。

「アパリシオの生徒は熱心でね、クロゴケグモも捕まえたんです！」

先生の机の傍で、二十歳の若者が壊れたタイプライターで練習をしている。打鍵がたどたどしい。この土地の人ではない。マグアロ・ヌエボで町の建設に従事する兵士たちといっしょに働くためにやって来たというが、ほんとうは、本を読んだりタイプライターを打ったりしたかつ



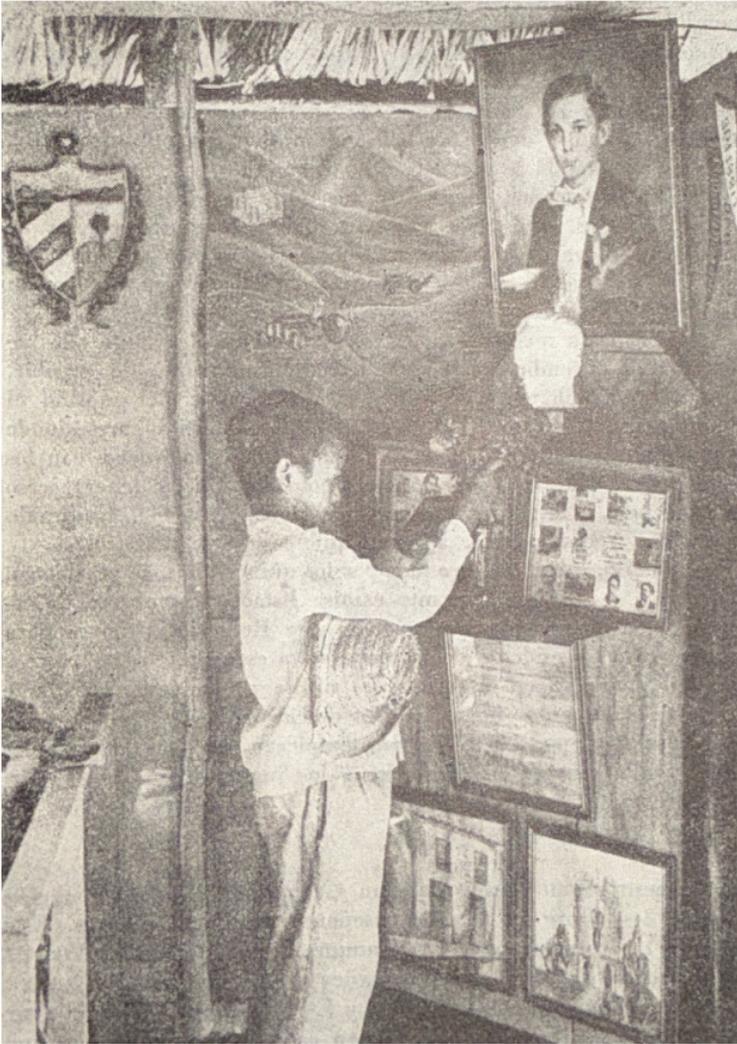
サン・フランシスコ・デ・アロヨンの小学校

たのだ。内気で真面目な性格で、滅多なことで笑わない。彼、マヌエルは教師になりたいらしい。

十五歳くらいだろうか、レイネリオは開放的で活発な青年で、新しいストライプのシャツと夏の帽子を被っている。きちんとした身なりで、アイロンもきちんとかかっている。それもそのはず、彼は学生協同組合のリーダーだった。

そして、金髪の少女。小さな裸足を隠そうとする恥ずかしがり屋の彼女は、将来、どんな人間になるのだろうか？

といっても、いまの彼らは、文



胸にメダルの少年の肖像画

字や数字、キャンディーやおもちゃについて学びはじめたばかり。

彼らボランティアの教師はチームで活動していて、エル・タンケ、リモンシト・アリーバ、フェルテス、ガトー・ネグロ、リモンシト・アバホ、ハグエイ、エル・ミラドールなど、千カバジェリアもある広いC2地域の教育を担当している。

パライソ地区の組織研究センターでは、教師たちが二週ごとに集まり、勤務地と周辺の地域で、職務遂行中に発生するいろんな問題の解決に奔走している。若い識字教育の教師たちは、授業のほかにも、家屋の補修や家畜の世話や農作業などを手助けし、農民のカウンセラー、看護師、友人としても活躍している。

教師たちは、いくら遠くても山を越え、人里離れた村々の活動にも参加し、政府から託された任務を遂行し、奉仕している。もちろん苦しくつらいこともあるだろうが、義務感がそれを克服しているのだろう。

彼らは、子どもたちに読み書きを教えながら、また、十二歳から十四歳の少年少女には、将来は活動要員になるよう指導もしている。こうした活動に生きる若者には、どんな将来があるのか、そして、彼らとともに学び考える子どもたちにはどんな未来が待っているのだろうか。

ラバ遣い

過去の過ちを糺すには、途方もない努力がいる。国民の一致協力と前進の努力によつてのみ、山に生きるシエラ・マエストラ、グアニグアニコ、そしてグアナハカビベスの人たちは、かつての苦しい暮らしから脱却できるだろう。

わたしたちは、いま、その活動のはじまりに立っている。

学校を訪ねたあと、考えながら歩いた。

この山々は明日はどうなるのだろうか？ 十五年後、二十年後はどうなのだろうか？ かつてラバが切り開いた丘陵地帯にはどんな道が走るのだろうか？ そして、裸足のまま読み書きもできない何千人もの子どもたち、そのうちの何人が祖国を担う人間になるのだろうか、どんな科学者や作家、芸術家、職人、技術者に育っていくのだろうか？

薄暗い午後も半ば、泥だらけの地面に足音が響き、グアシマスの木には鳥が遊び、風に揺れる葉の中に見え隠れする。

山の農民たちは、偶然、あるいは、必要に迫られて住むようになった。そして家を建てた。



ラバ遣いのマヨール

もつとも近くても隣とは一キロ近くも離れている。家は松や椰子やしの木を使っているが、削りもしない、原木そのままで塗装もない。屋根はトタン葺きで、床もなく土間のまま、梁や柱はマハグアや杉を使っているが、薪ストーブの煙で真っ黒に煤すすけている。そして、寝床のシーツは麻袋を切って縫い合わせただけ。この上ない貧困と孤立生活の中で、彼らは自らの力と知恵で生活物資を手に入れている。

ただ、山はけっして彼らを裏切らないし、見捨てない。だから、彼らは山に身を委ねゆだね、身を捧げることで山から生きる糧かてを手に入れているのだ。

グアバの木は丈夫だから、洗面器を置く台をつくる。硬くて赤いマホガニーは、テーブルや椅子の材料になる。彼らには役に立たないものはない。植物のすべてはもちろん、鳥や獣のすべても知っている。

そうして水の流れや夜は星を道標みちしるべに生きている。

山の男は氣立てがよく、おおらかで苦しきを見せない。そして、女たちは、これは古くからそうなのだが、貧しさを花で包み込んでいる。家や小屋は植木鉢と蔓花つるばなで彩いろどられ、周りには、芳かぐわしい香りの薬草がいっぱい植えられている。

ラバ遣いのマヨールの家も、また、小川を隔ててずいぶん離れているが、六人のボランティア教師が寄宿していた。彼らは、入り口の、壊れかけてぐらぐらする扉に、チョークと絵筆で「ホテル・バハレケ・リブレ」と書いた看板を掲げた。

青い制服シャツの胸元にネックレスが踊っている。植物の種を繋つないでつくったネックレスで、識字教師の象徴だ。だれが考えたのだろうか？ 彼ら自身なのか、かわいい女の子たちなのか、それとも、機智あふに溢あふれた詩人だったのか。

小屋の傍そばで、格好のいい犬が鶏を追いかけて遊んでいる。鳴き声を合図に、一家は、裏口にある脱穀場に走った。彼ら山の民は社会から孤立しているという人もいるが、そうではない。たしかに彼らは内向的で、閉鎖的な面もある。しかし、それは彼らのせいではないのだ。

この家では、陽気な「チャイナガール」のフェラは母親のような存在だ。また、物静かで口数の少ないミリアムは父親のようで、マヨールのパートナーのアンヘラはまだまだ若いから家



みんなで屋根葺き

を離れたことがない。もちろん、彼女も家族同様、読み書きができない。しかし、だれもがそれぞれの能力を最大限に發揮して暮らしている。

雨が降りはじめた。それが、あつという間に激しくなつて、居間兼食堂兼台所を兼ねたトタ屋根に叩きつける。外の景色も雨に掻き消されて見えなくなった。水路は濁流で泡を噴いている。

村のリーダーは五十歳前後の個性的な、混血の男だった。がっしりした体格だが、繊細な性格を隠せない。上の歯が四本も抜け落ち、赤い病弱な目が落ち着かない。マチエーテを腰に、ヤレイ帽を被り、糊の利いたズボンを履いてはいるが、硬そうな靴底には泥がこびりついている。

午後、広い家族のテーブルに七人のボランティア教師が迎え入れられた。彼らは中国式のラントンを持ってきていて、夜は、その明かりを頼りに、フェラといつしよに灰色がかつたサンタフアナの種を蒔いていた。

夜が更けると、蟋蟀の合唱がはじまった。途切れることを知らないBGMだ。それにつられて、雨に濡れた村のあちこちに灯りが点る。すると、ラバの囲い場からカラーが吠えて、静けさを蹴散らせた。しかし、何が起きるでもなく、カラーは低く唸ってどこかに消えて静かになっ

た。と、ラバ遣いはゆつくりと席を立ち、だれかを迎えに出て行った。

十歳か十二歳くらいの子どもを二人連れて、少女が入ってきた。編み上げブーツにズボンにシャツ姿で麦藁帽子むぎわらぼうしを被っている。エル・タンケのボランティア教師で、三人とも頭から爪先まですぶ濡れだというのにこにこしている。

あくる朝、三人は食事をすませると、少女は午前十時に家を出て、サン・パブロ・デ・ヤオに教師の一人を派遣した。彼は腰まで水に浸かりながら、増水した川を渡った。帰る途中、民家から泊まっていたいと誘われたが断った。

「生徒たちはよく世話をしてくれるんです。あと二時間もあれば宿舎に着きますから」
夜のとばりが彼らを包む。

「わたしはビレイで生まれました」

ラバ遣いはいった。

「父のことはよく知らない。ラバの手綱を握ったのは六歳の頃で、十二歳のとき、祖母に叩かれるのが嫌で家を出たんだ」

彼は農場で豚や乳牛の世話した。そして、二十歳で結婚し、二年後には八ペソを貯めて子牛を一頭買い、育てて十六ペソで売った。さらに、牝馬も買い入れ、転売して十ペソを蓄えた。

「牝牛を一頭買つて子牛を育て、それを売ったら七十ペソになったよ。よそのラバを遣つて働くと日当が一ペソで、二年かけて百七十四ペソの小銭を貯めた。それでラバを二頭半買った。連れといつしよに五頭買つて共同で遣つたから二頭半さ」

といつても、物事はうまく運ばないこともままあつて、協働に飽きたマヨールは一人で副業をはじめた。

「おれは彼にいつたんだ。『売るのが、買うのか、早く決めてくれ』って」

しかし、相棒は売ることを買うこともしなかつた。だから、全部、やつてしまった。

夏の灼熱の太陽の下でも、凍てつく冬の嵐の中でも、彼らは荷を背負つたラバといつしよに四日でも六日でも旅を続ける。プロビデンシアから、彼らが嫌がるエル・クラリンまで、シエラ・ネバダの尾根から尾根へ、蟻の群れのように彼らは進む。

「おれとラバはいつもいつしよさ。おれがどこに行こうと、それはラバがおれを連れていきたくからさ。やつらも、おれの仕事のために一日も休まず働いてきたんだよ」

視力の衰えたマヨールは、長雨のせいもあつて、最近ほとんど家を出ない。それが、もうすぐやってくるコーヒーの収穫の話をする、急に元氣になった。ラバ遣いを保護する新しい法律が成立し、コーヒー栽培の収入が安定したことにマヨールは満足している。

「フィデルは、おれたちのことを忘れないでいてくれると思うよ」

独裁政権との戦いの最終段階で、フィデル勢力はラ・プラタから平野部に進撃していた。マヨールは寝ていた。暗い中、扉を叩く音がした。激しい音だった。

「扉を開けると、巨岩のように背の高い、顎髭を生やした男が立っていたんだ。やつは、泊めてほしい、っていった。女もいっしょだった。妻のアンヘラが、飯の支度をしていると男は言ったよ。『ぼくはフィデル・カストロで、彼女はセリア・サンチェスです』って」

コーヒーを焙煎していたアンヘラは、逸話にさらにおもしろい話を添えた。

「わたしは、白いオイルクロスを広げて皿やグラスを用意したの。フィデルは、新しいおもちゃに夢中になっている子どものようにかわいくて、トーストに手を伸ばすたびに、わたしに許可を求めた」

彼はベッドを使わず、ハンモックに寝た。そして夜明けに、セリアといっしょにサンタ・バルバラの洞窟に向かった。

『『さよなら、奥様』って、フィデルはいつて、わたしの手を握ったの』

鶏が鳴いた。そんなフィデルがハンモックを吊るした柱に、マヨールがわたしたちのハンモックを結んだ。

アロヨン会議

晴れ渡った朝だった。学校に行く子どもたちが橋を渡る姿が見えた。どの顔も歡びに溢れている。新しい衣服と靴がそうしているのだろう。靴を履くのははじめてだから、靴が汚れないよう、足元に気を付けながら歩いている。空は澄み切って雲一つなく、鳥たちがにぎやかに飛び交って遊んでいる。

「こんななまで無事に生き延びられた彼らは幸せ者だ。このキューバの大地、その中に何世紀にもわたって、何千人もの子どもたちがゼニアオイに覆われたまま死の眠りについているのだから。」

きょうはこんないい天気なのに、パライソ地区のボランティア教師本部で開かれる会合は中止になるようだ。

「雨が止みそうにないからね」

市長は言う。

「マバイから先、丘は越えられんだろ。ラバでもきついからな」



アロヨン会議で

みんなはバヤモ伝統のチョロテ（焙煎トウモロコシの粉に砂糖とミルクを加えて煉り合せたもの）で朝食をとった。山の料理には独特の風味がある。もちろん、それしかなかったからだ、ある教師は、香りの強いケープジャスミンの花からつくった有名なデザートがあると教えてくれた。

フェリシノが馬に乗ってやって来るまで旅は終わらない。彼は、隣り合った三つの牧場、リヤノス・デ・マバイ、アロヨン・デ・バレンスエラ、サンフランシスコ・デ・アロヨンの農業組合の会長をしている。

フェリシノも、市長のように個性的だ。屈強な男でマチェエテで削ったような荒々しい顔立ちで、握手を求められると、表情一つ崩すことなく手を差し出す。勤勉で勇猛な彼らは、戦いでは獅子の

ように行動する。フィデルは最高の隊長を選び出した。

帽子を阿弥陀に被った大男は威厳たつぷりに話す。そんな彼の話を聞いたら、どんな地主もびつくりするだろう。農奴のように生きていた農民たちは、どのようにして、わずか三十カ月という短期に解放されたのか、自らの権利を主張し守る術すべを身につけたのか、聞いて驚くだろう。

フェリシノ一家はライフルの扱い方も知っている。

「農場や協同組合は、労働者を少ししか雇わない。しかし、わたしのところでは四日交代制で働いている。仕事のない者は一人もいない」

農民組合の労働者を受け入れることは生産集団化の目的に反する、そういう者がいれば、彼はこういうだろう。

「仲間を失ってはいけない。革命を続けるには一人でも多くが必要なんだ。革命のおかげで、おれたちはおれたちでいられるんだ」

かつての山の暮らしから学ぶべきものはいっぱいある。山岳ワイナリーを閉鎖し、道路を封鎖したあと、シエラ・マエストラに思想と武器を撒き散らす反乱を鎮圧しようとした政府軍によって、彼らは山から追い出され、妻子とともに餓死を宣告された。

「食糧を得るために牛を屠殺するよう、フィデルが呼びかけた。そのおかげで、おれたちは飢え死にせずすんだ。ラ・カンデラリアの牧草地に行き、まるで獣がそうするように、馬に乗って牛を追い、家に連れて帰ったんだ」

あの独裁者の残酷な命令によって、ヒバロの群れのように押し寄せる軍によって、彼らはジャングルや遠く離れた村に追いやられた。苦しみのあまり、生まれたばかりの赤ん坊を陽に晒して殺そうとした母親もいた。また、崖から身を投げたり、入水した老人も少なくなかった。武器を持った男たちでさえ、生き延びるために政府軍に従わざるを得なかった。

ミナス・デ・ブエイシトでは、政府軍の残酷な集中砲火によって、抵抗する者は皆殺しにされている。金鉱夫たちは坑道に閉じ込められて死んでいる。そんな遺体のない坑道は一つもなかった。

しかし、フェリシノは、自分が経験した苦しみを語るためにやって来たのではない。彼は、設立した協会を訪ねるよう、みんなに呼びかけている。歩いて二時間もかかるところだが、彼は宿舎の仲間といっしょに馬も用意している。

午後半ば、わたしたちは先導役として、ごつごつした岩と滑る粘土の急斜面を登りはじめた。フェラは新しいスカートにアイロンをかけたばかりで、「今度、来るときは、ズボンを履い

て馬に乗ってくる」と怒っている。息苦しいほど暑い。と、不気味な雲が頭の上を覆いはじめた。それでも、馬たちは馴れたもので、一步、一步、斜面を踏みしめ登っていく。

茂みを抜けると、溪谷の陰に緑に包まれた小さな家の前に出た。老婆がコーヒを挽いている。その音が緑の静寂を破って、わたしたちの後を追っている。道の両脇にはコーヒの木が密生していて、小さな白い花の香りが芳しい。みずみずしい緑の世界は生命力に満ち、静寂と深遠さで私たちを包んでくれる。

人里離れた山の家々の前には木製の十字架がいくつも並んでいる。十字架は死者の霊を呼び起こし、人々の身を縛る。農民の精神に有害限りない。無知は、教育によって追いつかなくてはならない。死者崇拜は人々の間に広く浸透している。十字架の霊力を過小評価してはいけない。進歩のためには、たとえ何年かかっても克服しなければならない。

崖の際に一軒の家があった。十代の息子がサンチェス・モスケラの兵士に殺されている。その母親が、死んだ息子と同年齢の旅団員に助けられながらトウモロコシの皮を剥いていた。

バレンスエラ地区に向かって歩いていると、戦闘の痕跡がいくつも目に飛び込んでくる。そのすべてがいまも生々しい。どんな茂みも革命戦士の隠れ蓑になり、どんな川の流れも彼らの喉の渇きを癒したことだろう。



農民兵たち

丘陵地帯への爆撃から身を守ったシエルターもいくつが残っていた。

アロエン・デ・バレンスエラの高地は霧に包まれ風もない。みんなはカオ畑の中の山道を進んだ。絶え間なく、流れる水音が聞こえる。その曲がりくねった小道のあちこちでフェリシノの招待客に出会った。彼らは徒歩と馬でやって来た。教師たちも旅団員といつしよに崖のような山道を登つ

ている。彼らの中にはハバナ陸軍士官学校の元士官候補生もいた。

フェリチーノが会長を務める協会は、椰子の葉とグアノでできた大きなホールで会合を開いていた。学校と同様、みんなの努力で建てられたものだ。土間にはベンチが並んで、入り口の壁にはカミーロ・シエンフエゴスの肖像画が掛かっていた。

老人たちはいった。

「花はわしらが植えたんだ。世話は民兵がしてくれている」

そして、こうもいった。

「フィデルの血の一滴の中には、百人の民がいる。もし革命が神の正義でなかったなら、一九五八年に、わしらはシエラの髭面男たちを助けなかっただろう」

それに、フェリシノの母親が口を挟んだ。

「司令官に、医者と歯医者を送ってくれるようにしておくれな。まだ、一人もいないんだ」

彼女は八十歳になるが、息子と変わらぬほどに遅^{たくま}しい。いま、読み書きを習っていて、二カ月後にはフィデルに手紙を書く、と識字教師に約束した。そうしないと、また悪魔がやって来て、連れ去られてしまうからだ。

三人の戦闘員の母でもある彼女は忙しい。

「だれにも知られずに、何でも好きなように手紙が書けることを、ずっと夢見てたんだ」
風が強くなり、椰子の木立が騒ぎはじめた。そして、雷鳴が抗い雄牛のように呻り、あつと
いう間に土砂降りになった。それでも集会は止まなかつた。

ギサ

ギサはバヤモからそんなに遠くない。

しかし、バヤモに比べると小さく鄙ひなびて、曲がりくねった道の果ての丘の斜面に、家々が貼り付いている。まさにシエラ・マエストラの町らしい。そこを荷を積んだラバ遣いの群れが上下りする。ラバは遊園地のピエロのように色鮮やかに飾られている。ラバはラバ遣いの声に合わせて蹄を鳴らし、列をなして通り過ぎる。ギサはいまも過去に生きながら革命の推進力になっっている。

鍛冶屋の鎚の音は、朝から晩まで町中に響き渡る。独特のリズムで、あちこちからやって来る荒ぶれ男たちの訛なまり言葉に調子を合わせている。街路が少ないこの町の中心は公園にあって、周りはシエラから面白い物や物売りにやって来る人で賑やかだ。

公園から少し行くと古い教会があった。植民時代にスペインの司祭と軍隊によって要塞に造り替えられた。それがマンピ族よって攻め落とされ、いまは黒焦げになって遺骸を晒している。ここ数カ月、町はいつになく活気に満ちている。旅団員たちは、ここで演奏したあとシエラ

に向かうからだ。また、はじめて道路が開通したこともあって、周辺のあちこちから農民が集まってくる。

旅団員たちは、ここに来ると、街のみんなとしゃべったり、菓子を買ったたりしたあと、ボランティア教師にあちこちを案内される。その一人、エル・フランセスは彼らを案内しながら行き交う人に笑顔を送る。向こうからやって来た男が彼らに握手を求めた。アルセニオ・トルとって、シエラの人で、年老いたいまも、険しい崖つぶちの家に一人で暮らしている。その日は、識字教育の教師のために牛乳を二缶買おうと、ラバに乗って十時間かけてやって来たのだった。

「先生といつても、まだ十二を過ぎたばかりだよ。お菓子をほしいとはいわんが、ほしいに決まってる。子どもはお菓子をほしがるもんだ。だから、きょうは買って帰ろうと思ってるんだ」

そういつて、旅団員の無欲と善意を称えた。

「なかでも、わしの家に泊まっている先生が一番いいやつだと思うな。ウンベルトといつて、マタンサスからやって来た。わしはあの子を大事に思ってる。だから、あちこち出かけるときも一人では行かせないようにしてるんだ。山は崖が多くて危ないからな。あの子のおかげでみ



ギサの街

んなちよつとずつだが、字も書けるようになったし本も読めるようになった。フィデルはいいことをしてくれたよ」

識字教師を乗せたトラックが次々とやって来ては、若者たちは種のネックレスを首に、黄色い声に笑顔をのせて、賑やかにそれぞれの持ち場へと散っていく。彼らは、その芽生えつつある青春の力を、貧しい山の暮らしに堪えてきた人々に分け合おうとしているのだ。

彼らは、エル・コロホ、オロ・デ・ギサ、ピノ・デル・アグアで活動している。賑やかな彼らに、荷を背負ったラバが驚いている。

そんな埃っぽい通りを、七、八歳だろうか、裸足の少年が、ゆるゆるのズボンを引きずるように歩いている。こんな賑わいはギサにははじめてのこと、きつと驚きの連続だろう。この喧騒は、町に新たな生

命を与え、未来を切り開くことだろう。

公園を囲んでいろんな店が並んでいた。がっしりとした体格の肌の黒い女性が、無花果いちじくの燻製をつくっている。マンゴー売りは大きな声で客寄せをしていて、金物店の前ではラバ遣いたちが、なにやら口論している。どこも通行人や物珍しげな見物人や、新しいものの好きな買い物客で溢れ、町に活気を生んでいる。そして、町にただ一軒の宿屋には客がいっぱい、表には、くすんだテーブルクロスのかかったテーブルが四つ並んで、白髪頭しらかのウェイターがいつも同じ料理を運んでいる。

公園の片隅にある停留所には、危険なものともしない屈強な男たちがたむろしていた。彼らは長い孤立暮らしを抜けて、はじめての旅にやって来たばかりだった。この国の旅は、平野はレールとタイヤで移動するが、シエラでは先史時代と変わらず、たよりになるのは自分の足だけだった。

停留所には、荷物の包みや段ボール箱や、食料や衣類の入った袋が積み上げられ、首の羽根を抜かれ、鶏冠とさかを刈り込まれ、赤く目を丸めた雄鶏が、数羽、袋の口から顔を覗かせている。ほかには、コーヒーの収穫用の籠がずらりと並び、少し離れてグレーの髪を後ろで丸く束ねた年老いた婦人が、ちよつと不安げな様子で、錆びついた鍵を掛けたスーツケースを大事そうに

抱えて座っている。

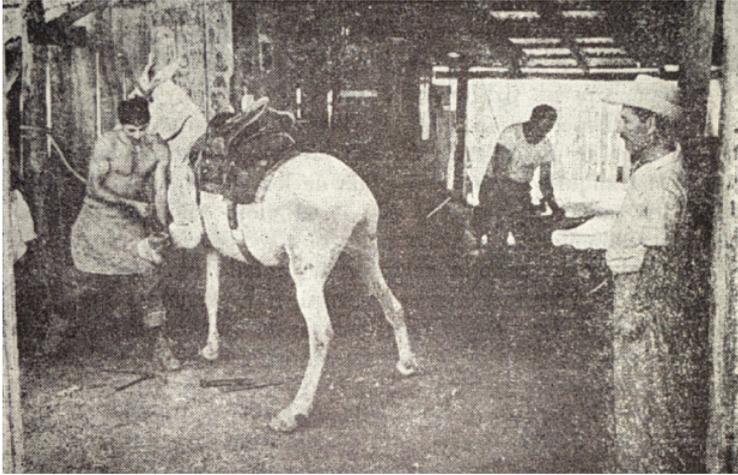
乗客たちはコーヒー・スタンドの周りに群がっていた。切符売り場の古びたカウンターには、子どもを抱えた余所行き姿の農婦や、真つ黒に日焼けしただんまり男や、色鮮やかなシャツに鍔広つばひろの帽子を被った山男たちが並んでいる。そして、待合のベンチには、肩にオムツをかけた上げて胸を半分ばかり開けた女が腰かけて、生まれたばかりだろう、赤ちゃんに乳をやっている。その子の名は、ビダ（命）というらしい。

タイヤを泥だらけにした「コマンド」が現れると、乗客たちは席の確保に突進した。これから先、雲に手が届くほどのシエラをめざして、ブルドーザーで拓ひらかれたばかりの急峻な狭い山道を登る、峡谷越えの旅がはじまるのだ。

ギサには、革命軍が山を下り平野部で繰り広げた最後の戦闘の鮮明な記憶が残っている。古い兵舎は榴散弾でいっぱいだった。十一日間、住民は激しい砲火と炸裂の中で暮らした。

川岸には、独裁者軍の地雷で破壊された戦車が骸むくろを晒さらしている。しかし、フィデルと仲間による包囲戦を語る者はほとんどいない。革命とその後の進展は少しずつ過去を消し去っている。ただ、尋ねられれば、だれもがああの日々を語りはじめた。

一日に五回も、独裁者軍の飛行機が町を爆撃した。オヨ・デ・ピパでは五百ポンド爆弾が大



ギサの音楽は馬の蹄鉄を打つ音

きなクレーターをつくり、水が噴き出した。小銃の轟音が鳴り響き、二百五十人の兵士が砲火に斃れた。しかし、マリアナ・グラハレスの女性大隊は一步も引かず、勇敢に戦った。

そして、オウムのパコとペペのことも付け加えておかないといけないだろう。元教師だった心優しい女性が飼っていたオウムで、文字通り、おしゃべり好きな二人だった。

飼い主は、毎朝、彼らに命令する。

「ペペ、一発撃て。さあ、パコも一発だ」

それ応えて、パコとペペは十口径の機関銃で一斉射撃をはじめたのだった。

静かな彼女の居宅には、過ぎ去った日々の生活が至るところに再現されている。大きな古時計は眠そうに振り子を揺らせているし、香り高い杉の戸棚や青塗装

の大きなフードが付いた赤いタイル張りのストロブに、マンサニージョのオルガン音楽のレコードが入ったビクトローラもそのままだ。そして、広々としたテールには、マンビセス一族に勝利をもたらしたあの戦いを記録したファイルと地図が飾られている。

あのギサの戦いとフィデル・カストロの戦いはよく似ているといわれる。一八九七年、カリクスト・ガルシア將軍は八百人の部隊を率いて、はるかに優勢で装備も勝るスペイン軍と戦って勝利した。ギサには十一の要塞があった。戦いは何日も続いて、ようやく十一月三十日に終わっている。フィデルは、一九五八年のその同じ十一月三十日にギサを攻め落とした。かつての將軍がラ・エストレジャ、パンチート砦、そして、いまのエル・フィルム・デ・コロノーを制圧したのと同じ丘陵地帯を、同じ包囲戦で攻略したのだった。

凸凹道でこぼこを歩いていると、ギサのほんとうの姿が見えてくる。小さな墓地は「ネクロポリス」と刻まれているが、あまりにも質素過ぎる。「小さな巡礼者の誠実さ」とあるのは店の名前で、「薬局」と看板の掛かっているところも、実際には馬具を売っている。

そして、この街にいまも息づいているのは人権の歴史だ。一九四三年にギーサ・ユニオン・クラブ・コスモポリタン・レクリエーション協会が設立されている。彼らは黒人と白人を平等に受け入れた。この国の端から端までが人種差別に浸っていたそんな時代にそんな奇跡があっ

たのだ。

ギサに行ったなら、まずは、町を取り囲む高台に登ってみてほしい。緑の木立の中に赤い屋根が点々とした静かな街が見渡せる。鐘の音が小さく聞こえるかもしれない。しかし、いつも心に響くのは鍛冶屋が奏でる美しい槌音だろう。

バヤミート

シエラ・マエストラの中でもバヤミートはもつとも厳しい環境にあるかもしれない。いつも雲に覆われ、一人、孤独をたのしむかのように、荒々しくも凜として聳え立っている。その中で、忘れ去られたようにバヤミートの子どもたちは生きてきた。

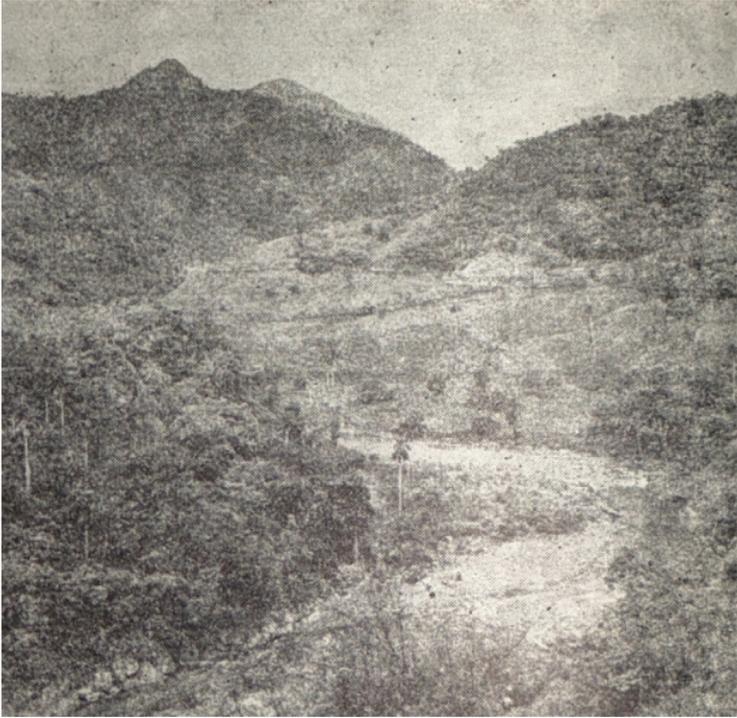
シエラを巡回するボランティア教師と識字部隊のメンバーにとって、バヤミートは最高の試練の場になった。それに挑戦したのが二十歳を過ぎたばかりの黒人ボランティアのカタリノ・バルデスだった。

*

「一九六〇年の九月十三日に、ぼくはバヤミートに着いた。シエラ・ネバダに入って、途中で道を訊くと、みんな、呆れた顔をして警告した。

『えっ、バヤミートに行くって？ やめとけ、やめとけ、いまなら、まだ間に合う！』
しかし、ぼくは登った。

バヤミートは、ラス・ヌエセス、カニャブラバ、エル・フランコ、ロット・ナンバー・ナイ



シエラに抱かれたバヤミート

ンの原野の間にあつて、四十三戸約
四百人が小規模なコーヒー栽培で暮
らしを立てていた。バヤモ川はその
辺りを源流にしている。

ぼくが何を見つけたかはうまく言
葉ではいえない。けれど、これだけ
はたしかだ。彼らに無知が四世代に
わたつて続いていた。話しかけても、
彼らはただ、頭を項垂れたり、裸足で
地面を搔くことしかできなかつた。
いっしょに学校を建てようといつて
も、『学校つて何？ どうやって建て
るの？』と不思議がるばかり。だか
ら、ぼくはこういったんだ。『学校
がほしいの、ほしくないの？』って

ね。そしたら、一人の母親がこう答えた。『もしそれが子どもたちのためになるというんなら、わたしは手伝うわ』って。そういつて、ぼろぼろの裸足で先頭に立つと、子どもたちも群れをなして彼女に続いた」

学校

「そうして男たちや年寄りたちも加わって学校ができたんだ。いろいろ知恵を絞って力を合わせて学用品も整えた。子どもたちは、きちんと座って、小さな鉛筆を握って、ぼくの話をよく聞いてくれた。

ぼくは協同組合を組織して、果樹園と菜園をつくって、プログレッソと名付けた。そして、数年後のキューバがどんな国になるか、ぼくの考えを話した」

サークル

「次の活動のステップとして、社会関係の改善をめざしてサンチアゴに行った。彼らはぼくに、本部をつくり、といつてもふつうの家屋だが、そこでパーティーや集会を開くように指示した。ぼくは、彼らの望みを実現することを諦めなかった。彼らはほんとうに貧しかった。だから、

何をどこからはじめればいいのかわからなかったんだ。小さな学校の集会で、ぼくはかれらにいった。

『樵きりをしている人は、その腕うでと鋸のこぎりをぼくに貸してください。みなさんそれぞれの能力に応じて協力してください。ぼくたちにはやり遂げたいという強い意志があります。犠牲はともないますが、その先には前進があります』

すると、だれも拒否しなかった。それどころか、彼らが場所選びをはじめた。そうして何度も探した末にもっとも難しい場所を選んだ。標高八百メートルの山の頂だった。そこから、バヤモの街やマバイ製糖工場はもちろん平野全体が見渡せたからだ。

ここはいつも寒いんです。強烈な寒さと弱い太陽、霧もやが^つねに^ぼくらを^包み^込んでいる。だから、資材を山頂まで運び、工場を建てるのは簡単ではなかった。それでも、成功は目標の大きさに決まるんだということをぼくは学んだ。フィデルのことを考えてみればいい。いちばん大変だったのは製材作業で、女性も手伝ってくれた。そのことをぜひ知ってほしい。

教育年度のはじめに、ぼくはシウダー・リベルタドにサークルの模型と旗を届けた。いま、キューバとベネズエラの国旗がポールに靡なびいて、団結と勤勉の象徴になっている。別の地区からボランティア教師として来ていたイブラヒムがベネズエラ出身で、ぼくたちを助けてくれ

たからだ。

三千五百フィートに及ぶ木材が必要だった。社会福祉局からは、サークルの屋根に使う亜鉛板を買うために二百ペソを提供してもらった。塗料とセメントも寄付してもらった。ぼくらは学校に集まり、完成した建物をじっくりと眺めた。頂上から見ると、鳩がとまっているようかわいかった。

落成式の前日、建物はピンクに、ドアと窓は青く塗った。みんなには驚きの出来事だった。彼らは絵筆も絵の具も見ることがなかった。けれど、蟻のように斜面を登り、手伝ってくれたり、見物したり、祝ったりするためにやって来た。シエラ・マエストラではじめての祝賀会ではなかったか。

庭園には六本のロイヤルパームが植えられ、マルティの胸像を囲んでいる。入り口には色とりどりの石材でこう刻まれた。

『祖国か死か、われらは勝利する』

そして、

『忘れ去られた人々を助けよ』

とも。このサークルはコンラド・ベニテスの名にちな因んでいる」

落成式

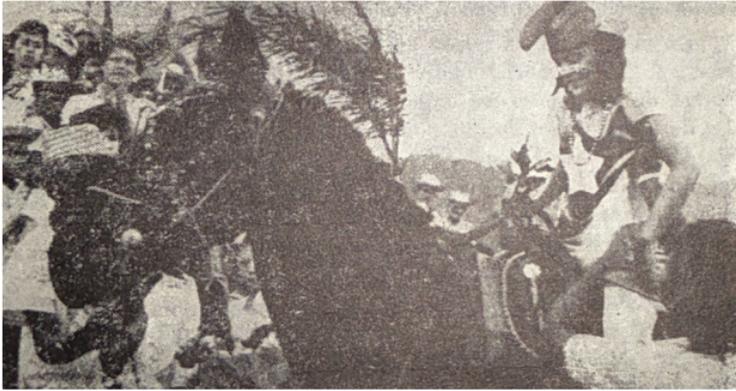
「落成式の日は、まるで山から人が湧いて出てくるかのようだった。いろんな小道を通り、丘を上ったり下ったり、崖つぶちをかすめるようにしてやって来た。そして、あちこちでサークルについて語り合った。老人たちは、集まった人の数に驚いた。なにせ、八百人を超えたのだから。

就任式は絵に描いたようだった。コンラドの肖像画に花を供え、少女が詩を吟じた。

もっとも意義深かったのは、コーヒートの女王と王が選出されたことだ。山の学校の子どもたちの中から、革命についてのアンケート調査によって選ばれた。彼らはすでにマルティを愛し、彼のこと、その生と死や彼の悲しみや偉大さについてもよくわかっていた。もしマルティがバヤミートにいっしょにいたなら、いろんなことを教えてくれただろうにと残念がった。

プンタ・デ・ランサ校の少女で、フランス人マルケッティの教え子が、コーヒートの女王に選ばれた。王様はバヤミト出身の多くの教え子だった。

祝賀のために集まった資金はたった五十ペソだった。信じられないと思う人もいるだろう。そう思うのは、この辺境の暮らしを知らないからだ。お金のない人は、鶏肉や果物などいろん



バヤミート最初のフィエスタ

な食料を提供した。そして、訪問者を自宅に泊め、子どもたちといっしょに寝させた。

その日は、教師、旅団員、農民たちの会合で幕を閉じた。彼らはシエラでの闘いについて話し合った。歌や朗読やゲームもあって、バヤミートは盛り上がった。

四月二十三日、子どもカーニバル王戴冠式の前夜、だれもが眠れなかった。玉座が必要だったが、貧しい黒人の家には祖母が使っていた壊れかけた椅子しかなかった。しかし、フランセスは何でもよく知っていて、ナイロンのテーブルクロスを使って間に合わせようとした。それは、ぼくの生徒のマリアが用意してくれた。贅沢品だった。マルケッティはテーブルクロスといっしょに、画鋏の箱と赤いリボンを二つ、そして椅子を二脚持ってきた。正直、それで玉座ができるとは思っていなかった。天蓋てんがいがなかったものでどうしようかと迷っていたら、老婆がいった。

『コーヒーの王と王妃の玉座なんだから、コーヒーの木の枝を使ったらどう？』

そして、玉座の後ろには、高く旗が掲げられた。すると、プンタ・デ・ランサ出身の博識者はじつと考えて、こういった。

『玉座の間に絨毯がないのはおかしいな』

だれもそんなものを見たこともない。そこで知恵を絞った。そうしてみんなで作くり上げたのは、幅三十センチほどの四角な縁取りふちどの中に、熟したコーヒー豆と生豆を敷き詰めたバヤミート特製の絨毯だった。縁取りは、ぼくが床にチョークで描かいた」

楽団

「サークル祭のフィナーレを飾るために、音楽隊がクアルトンの高みに登った。楽団はマルティの名をもらっていた。見慣れない楽器に、みんなは、フィデルが持ってきた新しい武器かもしれないと勘違いした。演奏がはじまると、みんなの目は潤んで輝いていた。『みんなが革命の基盤をつくったんだ、いつかフィデルがやって来るから』って。だれもがサークルを誇りに思った。

毎朝、学校に行くたびに、ぼくは自分の義務を実感するし、ぼくを支えてくれるみんなに感

謝する。だから、みんなへの愛も深くなるんだ。もっともつとキューバ人らしくなろうと思う。ぼくが使命を成し遂げるまで、だれもぼくをここから連れ出せないだろう」

シエラの雨

八月は水祭だ。朝日に洗われたように空は澄み渡り、雲一つない。息を呑むようなけしきだ。それが、午後も半ばを過ぎると青い空も悲しみに染まって、太陽は雲に覆われ鉛色の空に雷鳴が轟く。木々や鳥や獣たちすべてがそれが静まるのをじつと待つ。牛たちは嘆きの声を上げる。と、さらに風が吹き荒れ、稲妻が炸裂し滝のような豪雨になる。

午後になると、毎日のようにこんなけしきが続く。だから、ギサまで行ってくれる車を見つめるのは至難の業だ。道路は開通したばかりで舗装もされていない。川は増水して流石だらけでタイヤが滑る。雨でぬかるんだ土砂は突然崩れ落ちて木々を風倒す。

バヤモではINRAがこうした難行を解決した。運転手、といつてもたった一人だけなのだが、ファン・グスメリが、パワフルなタトラ・トラックを運転してシエラ・マエストラを登るといつてくれた。

三十分後、タトラがホテルの前に停まった。

グスメリは若い黒人男だ。道の具合がいいときはおしゃべりだが、ハンドルが利かなくなる

と黙り込む。

「こいつはチェコ製だ、行けないところはないさ。シエラ・マエストラを端から端まで制覇してやる」

と意気込んで、タトラを発進させた。時速六十キロ、いや、もつとだつたかもしれない、ギサをめぎし、走りに走つた。やがて、ギサ川の畔ほとりに出た。砕けた石が川床を舐なめるように押し流されている。そこにタトラが、鉄を叩くような音を立てて駆け込んだ。

サンタ・バルバラ地区の小さな家を二、三軒、尻目に先を行く。マカナク、ラス・マンテカス、カカイト・デル・グアマ、モンテ・モハド、オロラ……、と高台に不安そうに村々を取り残されている。

灼やけ付くような太陽の下、曲がりくねつた小道を行くと、制服を着た若い男たちに次々と出会つた。若い闘士、識字教師、ボランティア教師……、そのだれもが病氣の子どもを背中に担かいだり、馬の鞍に乗せたりしていた。

そうして、オロ・デ・ギサに着くまで疲れを知らなかつた。

古びた居酒屋があつた。屋根のつぺんから土間まで眺めても、百年はとづくに過ぎているだろう。入ると、虫食いだらけのカウンターがあつて、生臭い危険な臭いが鼻を衝つく。棚には



ボランティア教師は家族の一員

いろんなものが並んでいた。けれど、どれもが厚い布団のように埃を被^{ほじり}っている。青いデニムの作業着、牛革の靴紐や、強盗でも縛るのか太いロープやヤリー帽やナイフ、そして、粗末なエナメル塗装の便器セット……。

と、しんと静まり返った店があった。十字架の形をした小さな金箔の真鍮の銘板や、花輪や、石棺を飾るのだろう、いろんな備品が並んでいる。

わたしたちは、「安らかに眠れ」と書かれた、格安で、なんとなく陰鬱な装飾品を一つ買うことにした。レジに持っていくと、店員に横目でじろつと睨^{にら}まれた。

「ラハドの丘に行くのなら、標識を見失わ

ないようにね。ここ一週間、雨ばかりなんだから」

不気味な冗談を飛ばして店員は注意した。

店を出たところに黒人の少年が座っていた。十二歳くらいだろうか、物静かで生真面目まじめそう
な少年で、制服とベレー帽に、首にはあのネックレス……。

ホセといったが、若き闘士だった。シャツの右袖には、ピコ・トウルキノには九回登ったらしいバツジをつけている。自信たつぷりの顔をして、四つのネックレスの一つをわたしの首に掛けてくれた。

シエラ・バダの容赦ない雨、幾重にも聳え立つ峰々も、山肌がかなり険しくなってきた。それをタトラうなが呻りながら上っていく。岩が車体に跳ね返って、大砲の弾を喰らったように轟音を立てる。道沿いには一人の影もなく、深い草叢に隠れてやつと現われた小屋の横には、霧雨の中、物干しロープが風に揺れている。

雷鳴も稲妻もどこかへ行ってしまったというのに、また、土砂降りがはじめた。と、たちまち車輪が泥水の渦の中に沈んで、車体が傾き横滑りした。

途中のエル・プラタノには、窯かまの煤で黒くなったパン屋に、六、七軒の家屋、少なくとも百年は経っているだろう靴屋があつて、襪はら襪らのような服を着た子どもが三人、笑顔いっぱい、マン



ギサに向かう大型ダンプ

ゴーを売っている。香りのいいマンゴーがいっぱい、のコーヒー籠を二人で抱える子どももいれば、黒鼻の子豚の群れが、ぶう、ぶう、走り回っている。

村外れの岩の上には大きなガラスの壺があつて、蝟燭ろうそくの燃え残りが山のように積もっている。旅人やラバ遣いや御者たちが敬虔けいけんな祈りを捧げたことだろう。カリダード・デル・コブレ像の足元に小さな塚をつくっている。いよいよ、シエラへの挑戦がはじまるのだ。

運転手の腕は、熟練と勇気を物語っている。まるで目と耳が付いているようで、一瞬たりともハンドル操作を誤らない。

目の前に、人を拒むように険しい嶺が聳えてきた。いつ、岩が崩れ落ちてくるかしかない、トラクターとブルドーザーで切り拓かれたばかりの瓦礫道だ。嶺が野生の暴れ馬のように立ち塞がり、トラックの前進を阻はばみ続ける。運転手の腕に筋肉が、鋼鉄のように盛り上がる。

エンジンの轟音が途切れない。右手には切り立った断崖絶壁が続き、左手は谷が深く落ち込んで濁流が渦を巻いている。タトラ山脈は、狭い谷のその先にかろうじて収まっている。ヴァージン・ヒルを過ぎ、大曲おおまがりに差しかけたところで、ファンはにつこり笑い、煙草をくわ啜くわえて火をつけた。

と、土砂降りの中に人が現われた。プエルト・パドレからやって来たルーカス・ラブラダで、ピノ・デル・アグアに行くらしい。そこに十五歳と十三歳の子どもが待っている。彼は漁師をしながらファニート・モラ協同組合で働いているという。

「子どもたちは数カ月前からシエラ・ネバダにいる。トゥルキノにはもう三回も登ってるんだ」
うれしそうに笑って葉巻に火をつけ、一服、ふかした。

オロ・デ・ギサに着くまでの二時間は退屈しごく、トラックの荷台に、大きなシートを被り、馬鹿話と鼻歌に気を紛まぎらわせて、じつと堪えていた。雨は変わらず激しく、川は増水し、あちこちに張り出した岩々が拓かれたばかりの道路を寸断していた。

鉛色の午後の光の中に、シエラ・マエストラはその素肌を現わした。いくつもの滝が暴れて岩肌を洗い流している。

オロ川は蛇のように曲がりくねり、岩肌を激しく叩いて白く泡を吐いている。その流れのす

ぐ近くに、木造のトタン屋根の建物が下草に半分隠れて見える。そして時折、土砂降りの雨音の中に鈴が鳴り響いてラバの群れがよつきり現われ、ぶつかりそうになる。

「おーい、おい、いい子だ、いい子だ」

ラバ遣いの声といっしょに鞭の音がした。ラバは従順で、指示に従い、ほかの仲間を先導する。と、今度は、コーヒーの籠を積んだ荷車が横をかすめた。

オロの高地では、ピカソの峠越えは困難を極める。タトラは三度もスリップしては後退し、何度も傾き、息を切らしながら、ピカソ峠に辿り着こうと奮闘している。ファンの腕や額や顎あごから雨の雫が滴り落ちる。ファンは唇を噛み締め、強く踏み込んだ。アクセル、ブレーキ、また、アクセル……。

なんて遠いのだろう！

ブルドーザーが空き地に停まっっていて、オロのキャンプの少年たちも道路の修復に参加していた。

コーヒーの木が茂っていないところなんかどこにもない。午後の静寂の中、雨粒が光沢のある葉を滑り落ち、緑やピンクや赤など、無数の豆の顔を洗っていた。小さな緑色のトウリナガエルの歓びの歌が神秘的に響き渡る。まるで、コーヒー農園の魂を歌うかのようで、姿を見せ

ないが、どこかの泉からだろう、轟音を立てて水が流れ落ちている。

シエラでは、何週間も何カ月も、昼夜を問わず降り続く。情け容赦ない雨の下で、わたしたちは、あの頃のフィデルとその仲間たち、そしてセリアを想った。二年の苦難、孤独と飢えに堪える戦いだつたに違いない。

水のカーテンの向こうに、少女と少年を連れた若い女性が現われた。少女はナイロンのケープに覆われている。彼女は教師で、生徒を家まで送っていくらしい。少年は旅団員で、彼女の手伝いをしている。

しばらく行くと、ラジャド丘陵が見えてきた。斜面いっぱいバナナ畑が広がっている。オロ・デ・ギーサはもうすぐだ。

オロ・デ・ギサ

一瞬、太陽が顔を見せ、荒涼世界を明るく照らす。柔らかな光が峰々を包み込み、雲を貫き、丘深く立ち込めた霧を消していく。陽光が川面に反射し、シエラの一角に射し込む。そこには、かつての独裁犯罪の傷跡、それに抗った戦いの痕跡、革命によって切り開かれた新たな歴史が刻まれている。

ソサ・ブランコに虐殺された息子たちの肖像画を掲げて喪に服す母親たち。父や兄弟や恋人を殺した犯人を前に涙を流す農婦たち。

黒衣をまとった人々の列の前に、安堵も休息も平和も希望も許しも得られなかった。

「覚えていないのか？ ソサ・ブランコ、あなたはわたしの夫を殺したんだ」

「兄弟たちの死は、おまえの責任だ」

「おまえは病気だった父を生きたまま焼き殺したんだ」

ギサの丘の奥深く、苦痛と恐怖から生まれた静寂は、岩や洞窟、そして不満や涙の向こうまで漂っていたに違いない。泣き声は乾いた血に変わり、憎しみは枕に頭を沈め、計り知れない

ほどの時を刻んだ。

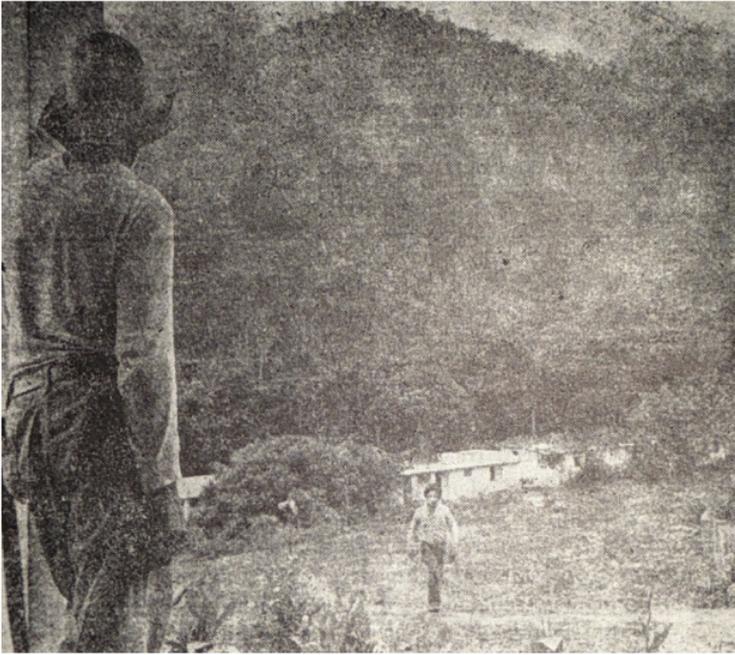
不当な死がギサの丘に忍び寄る。そんな中を、黄色い制服を着た軍隊との旧来の因縁を清算するという歴史的任務の重圧に押し潰されそうになりながら、フィデルを先頭に反乱軍は新生キューバの夜明けをめざして戦った。

雨の中、わたしたちはその跡を探しに来たのだが、見つからなかった。オロ・デ・ギサは小さいが、近代的な町に変わっている。かつての悲惨さはどこかに消え、丘の上には新しい家々が、整然と並んでいる。

どれもマグアロの家々のように、ピンクや太陽のように明るい黄色に彩いろどられている。もしかしたら、キューバの海を思わせる青色に塗られているものもあるかもしれない。

左右対称の通りには、レンガ造りとタイル張りの家々が立ち並び、ハンカチのように広がる庭園にはジャスミンの花が咲き誇っている。水道橋も診療所もある。学校はもちろん遊園地もあって、かつては遊びを知らなかった子どもたちが楽しそうにはしゃいでいる。

タトラのトラックが新型オロを積んで村に着くと、ハバナからの若者数十人が、わずか三十カ月前までは何の理由もなく殺され、自分たちの居場所も見つけられなかった人々の手助けをしている、そんな姿に出会えるだろう。



オロ・デ・ギサの昨日と今日

ここには革命青年労働旅団の一時キャンプがあつて、貧しい人々のために、水道や電気設備が整い、花々が咲き乱れた新しい家屋が用意されている。旅団の若者たちは、ヤシ板やトタン屋根でできた粗末な小屋で夜露を凌いでいる。

そして、彼らは、道路を見張るために農民兵を訓練したり、塹壕を掘ったりしている。ほかにも、煉瓦積みを手伝ったり、畑を耕したり、コーヒーを収穫したりもしている。

町の麓の方でも彼らは活動している。ここでは川も穏やかに流れて彼らに優しい。だから、彼らのキャンプには笑い声が絶えない。

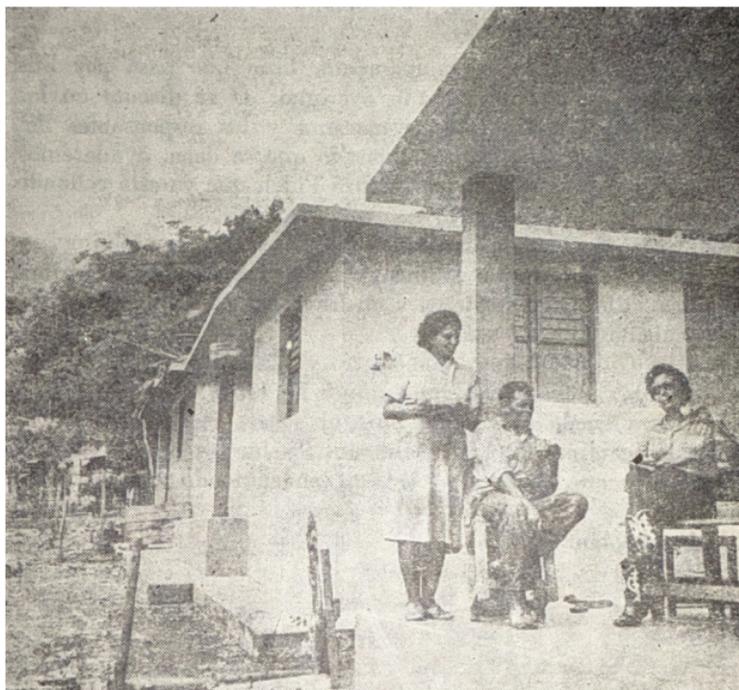
もちろん、識字教師もいて、彼らといっしょに各地から集まってきた母親たちもいる。彼女たちはラハドの丘やピカソ交差点を登って子どもたちを抱きしめる。たのしみになっていた東の間の再会だ。マカグアの木陰や野生のビヤクシンの木陰で、母親たちは繕い物をし、子どもたちの体を洗い、抱きしめ、キスをする。

浅瀬を選んで流れの早い川を渡ると、バラが咲き誇る岸辺に辿り着いた。アルゴテ兄弟はここで命を落とした。荒れ狂った濁流が彼らを呑み込んだのだ。その姿を母親はいまも胸に秘めている。毎朝、キャンプの若者たちとともに花を供えにやって来る。

新しい家の玄関先では、香り高い山のコーヒーが振る舞われていた。遙か、ロマ・デ・ラス・フロレスの山頂を覆う霧が陽光に流され消えていく。

誰かが語りはじめた。

「おれたちは家族経営のコーヒー協同組合をつくっていた。三人でね。一人は梱包を受け持つてそれを運ぶためにラバを買った。もう一人は小型トラックを運転して、三人目は栽培を専門にしていた。あまり儲からなかったけど、それぞれ、家族を養っていた。二回目の収穫が終わる頃だった。ソサ・ブランコの部隊とガジェゴ・カウリーの部隊がやって来て、ギサで買ったばかりの雑貨とコーヒーの売上金千ペソを奪って逃げた」



新しい家の玄関先でマウンテンコーヒー

さらに一日、同じ傭兵部隊がオロに現われ、非情にも男たちを家から連れ出し、縛り上げ、次々と機関銃で撃ち殺した。そして、村を焼き払った。

「息子が二人いるが、一人はカミロ・シエンフエーゴス校に通っている。もう一人は、ヒバラでコーヒーとココア生産の技術者になるらしい。二人の娘はバヤモの学校で勉強している。革命はおれたちに土地をくれ、無利子の融資もしてくれた。革命がおれたちに与えてくれたものは、もうだれも奪えないさ」

彼らは、本についても話してくれた。「キャンプにはいっぱい本が届いてい

る。わからないことは、教師やキャンプの責任者といっしょに話し合っている。おれたちが学ぶべきことを学べば、フィデルが植えたものや、根付いたものを失うことはないだろう」

じつに鮮やかな言葉だ。現実を如実に謳っている。そういえるのは、自由なキューバ人として大地に生きることを誇りに思っているからだろう。

オロ・デ・ギサは夕暮れを迎えている。タトラ川は、鼻息の荒い馬のようにシエラに向かって駆け上がる。そのシエラでは、識字教師たちのランタンが新屋となって灯っている。キューバはもつともつと輝くだろう。

四月十五日、サンチアゴ

マンサニージョ、午前七時十五分、古びたホテルで、ウェイターやスタッフが動きはじめた。ドアが開く音、ひそひそ話、そして、廊下を行き交う足音が静寂の中に心地よく響く。

ダイニングルームに入ると、気のよさそうな若いスタッフが朝食の準備をしていた。好奇心旺盛な若者で、いろんな質問を投げかける。

なぜ、ズボンと重い戦闘ブーツを履いたまま徹夜するのか？ どこへ行くのか？ カミロ・シエンフエーゴス校に行くのか？ それに、わたしたちは気持ちよく答え、あとは朝食とカメラマンの到着を待つだけだ、と付け加えた。

七時に着く予定のカメラマン、ジルベルト・アンテは息を切らしてやって来た。顔も声も強張こわばっている。

「アメリカ軍の戦闘機がハバナとサンチアゴ・デ・クーバを爆撃している！」
ラジオで聴いたばかりだという。

わたしは、椅子から飛び上がるほどびっくりして息も荒くなった。ほかに何かわかっていな

いのだるうか？

ボヘミアの事務所に電話して、サンチアゴの取材許可を求めた。そして、そのまま飛行場に走った。

マンサニージョは、朝から爆撃のニュースで、人々は右往左往して騒がしかった。家という家から、通りや街角から民兵が集まっている。みんな、ラウルの警告に伝えて、ライフを手には防衛の準備をして、車やトラックが次々とサンチアゴに向かって走る。同じように、町や農場でも警戒をはじめているが、バヤモでもコントラマエストレでも、恐怖の混乱や動揺や騒動の兆しは見られない。

ラウルの呼びかけが続いている。

——東部の農民よ、民兵よ、革命の戦士たちよ、集合せよ！ 部隊リーダー、民兵、陸軍司令官は、武器保管場所に集合せよ！ 各自、持ち場につけ、自由のためには代償も止むを得ない！ みんな、銃を取れ！

若き司令官の叫びは、どこまでも響き渡る。秩序に乱れはない。だれもが職場や戦闘場所待ち構えている。拡声器を付けたトラックがゆつくりと巡回し、警戒を呼びかける。

「……二十万人の犠牲者との約束は必ず守る。侵略者を殲滅する。」

太陽の下、農場ではみんな武器を携え、いつも通りに働いている。何台ものトラクターが巨大な芋虫のように走り回っている。

ヤラでは、ライフルを手に麦藁帽の民兵たちが、口々にラジオのニュースに興奮している。

「ハバナで二機、撃墜した」

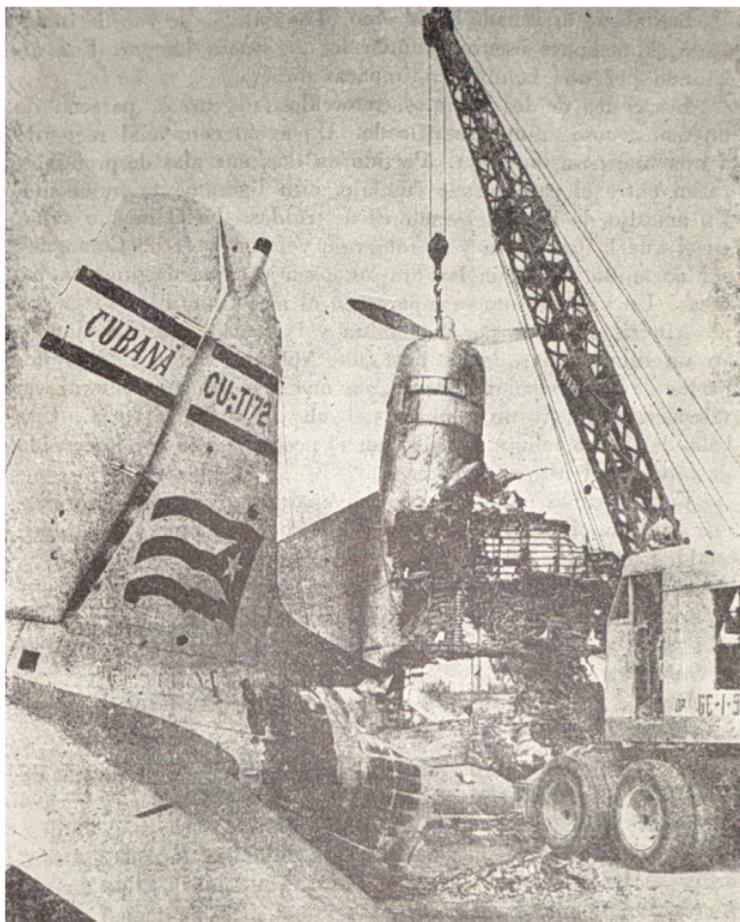
「もう一機はマイアミまで逃げたらしい」

丘の斜面に、エル・コブレの十字架が、クロムメッキで刻まれている。アンブロシオ・グリッ口療養所の先には、サンチアゴ湾と東の街が遠く白く続いている。雲間に聳えるそびシエラ・マエストラが、きょうは一段と高く見える。

彼女はキューバの自由の母、日々、気高くなっていく。

サンチアゴは、正午というのに、びっくりするほど静かだ。それでも、人は行き交い、店は客でいっぱいだ。どんな人たちなのだろう。どうしてあんなに激しい爆撃に堪えられているのか、これからも続くだろう大規模攻撃の前触れだということに！

駐屯地から駐屯地を経て高速道路を空港に走った。ベルサレス・モーターの前で、陸軍軍曹に身分証の提示を求められた。モーターにはバラコア山地からの若い農婦たちが大勢いるらしい。



踏み潰された蝶のような民間航空機の残骸

空港のターミナルビルはどこも穴だらけで、天井から剥がれた石膏ボードが、葬式の幕のように無様に垂れ下がっている。公園には、後光弾にやられたのだろう、弾痕だらけの車が何台か転がっていた。

航空管制局の滑走路管理長が様子を語ってくれた。

「歩いていると、爆

撃音だけでなく、家のドアや窓の振動もすごかった。急いでここを出て仲間のところに行った。十分もかからなかっただろう、モロハイウェイを渡ると、男や子どもや老人たちが逃げ惑っていた。恐怖ではなく、怒りを感じた」

滑走路を見下ろすドア越しに、青い制服を着た隊員と一般市民が空港の復旧に懸命な様子が見える。彼らはグループを組んで、被害の復旧に励んでいた。

「攻撃を受けたときは勤務中だった」

と管制長がいった。

「FAR機二〇八号が滑走路に進入したかどうか、確認するために外に出た。と、オリーブグリーングリンの戦闘機が二機、目の前に迫ってきたんだ。驚いている間もなかった。五百ポンド爆弾が、轟音とともに空を切り裂いた。滑走路は炎に包まれた。何機か、飛行機に破片が当たって燃えていた。五分後にカマガエイに飛ぶはずだった定期便のキューバ航空CUT一七二便やDC三七や海軍のカタリナ、それから、陸軍のC四七も炎を上げていた」

廃墟のようになった飛行場に出てみた。被害は一目瞭然りゃんぜんだった。かつての格納庫かくたぐらだったところは、黒い染みに覆われていた。爆弾の直撃を受けたのだ。

捻じ曲ねがって真っ黒になった戦闘機の残骸は、惨殺された怪物のようで、旅客機は引き裂か

れた蝶のようだった。胴体は真つ二つに裂け、ちぎれた翼が、焦げた胴体の上に乗ったまま、まだ煙を上げている。傍には、壊れたエンジンが骸を晒していた。ジャーナリストとカメラマンが、昨日、カマグエイからマンサニージョに飛んだその飛行機だった。クレーンが残骸を持ち上げると、燻っていたのがまた燃え上がった。

空港の外には、ポプラの木陰が涼しそうな公園はそのままだったが、アントニオ・マセオの胸像が機銃掃射を受けたのだろう、大口径の弾痕が胸を貫いて背中に抜けていた。植民者への怒りと憤怒の象徴が、なんということだろう。

攻撃機の急降下音を聞いた事務室の女性は、最初の爆発音で外に走った。身を守ろうとしたのではなく、軍人として、敵に対峙し撃退したかったのだ。彼女は民兵だった。

午後三時、飛行場は午後後の飛行を受け入れる態勢に入っていた。

「二機の戦闘機が高度八百フィートか千フィートで滑走路上を旋回しながらホバリングしたあと、高速で横切つて爆撃していくのが見えた。ちょうど午前六時十五分だった。空爆の気圧の上昇で止まったのだろう、待合室の時計がその時間をさしていた」

サンチアゴに戻ると、通りは賑やかになっていた。労働者たちはそれぞれの代表団との会合をはじめている。モンカダ地区では対策会議が開かれ、午後更けると復旧計画も整い、活動



アントニオ・マセオも機銃掃射を受けた

も本格的になった。

みんなの視線はシエラ・マエストラに向いているようだった。すぐ目の前にあって、いつもみんなを見守っている。

軍病院では、狭い白いベッドに包帯を巻いた砲兵が横たわっていた。五十口径の銃を手に哨舎にいたところに、戦闘機二機が急降下し機銃掃射を仕掛けてきた。その一発が肩に当たったのだった。

「われわれが一斉射撃で応戦すると、やつらは高度を上げて攻撃を続けたが、やがて、グアンタナモのカイマネラ基地に引き揚げた。第四哨所の哨舎は榴散弾で突き破られ、二発が兵士に命中した。B二六が急降下して低空飛行で機銃掃射を浴びせたんだ。われを失ったんだろう、

女が待合室から外に飛び出した。その脚元に榴散弾が雨霰あめあられのように降ってきて、一面に黄色い砂埃すなぼこりが舞い上がった」

そんなサンチアゴに夜が来た。わずかな光がティヴォリをさらに彩って、月が刺繍されたように美しさを添えている。植民地時代の砦や、湿っぽく香り高い木々、眠りについた家々……、すべてが希望をもつて警戒を怠らない。夜のサンチアゴには詩人も吟遊詩人もいない。ギターは歌わず、ただ二つ、怒りと希望だけが静寂の夜空に煌めきらいていた。

白い家は、一つの記憶に鎮しずんでいた。居間のテーブルの上には、紫のリボンが二本とバラの花束、そして、若き大尉の肖像画が飾られている。夜明けに、パイロットは司令部の命令で哨戒飛行に出た。そして、暗黒の雲の中を、白銀の月に向かって飛んだまま、彼は戻らなかつた。けれど、白い家ではだれも泣かない。すぐ近くに、もう一つの戦いが迫っている。マンビのラツパが鳴り響き、拳を握り締めよと告げる。だから、だれも泣かない。戦いに、どうして涙があるだろう。

「オレステスは望んだように死んでいった。キューバのために……。だから、泣くことはないでしょ」

妻がいった。

手を振って、わたしは別れを告げた。

だれもが痛みと誇りを胸の内にしかりと抱いている。そんなみんなが暮らすこの町は、決して屈辱をそのままに生きることはないだろう。サンチアゴは、今日も明日も、いつものように戦いに備えて構えている。

戦闘日誌

サンタ・イフィヘニア墓地、四月十七日午前九時

マルティはアメリカ大陸に最高のものを置いていった。もつとも愛された国旗に覆われた彼の亡骸は、いまも、アメリカ大陸とその運命が一つになるときを待っている。

サンタ・イフィヘニアには人影がなかった。ごくわずかに、花束と悲しみを携えて弔問に歩いているだけ。ほかには、鍬を担^{かた}げた墓掘り人と、朝日を翼に乗せた鷺^{さぎ}が死の静寂の中に遊んでいるだけ。陽は高く、空は水晶のように澄み渡って雲一つない。偉大なキューバ人の魂を鎮めるここで、だれもがその思い出を辿るのだった。

サンチアゴ・デ・クーバ、午前十時

サンチアゴには、犯罪のなかった通りや街は一つもない。サント・トマスの小さな広場には、台座と鏡を兼ねたブロンズの銘板があつて、独裁の手に倒れた犠牲者の名が刻まれている。フ



二人の農民兵

ランク・パイスはその前で演説した。

「われわれは戦いの真つただ中にいる。侵略がはじまっているんだ！」

物売りの声、行き交う車のエンジン音、そんな街の喧騒が、一瞬、消えて静まり返る。そして、一分後、またサンチアゴは動き出した。振動が伝わってくる。それに突き動かされるようにしてホテルへ、そしてバスターミナルへ。混雑した待合室には、人々の不安が燃えていた。声を潜めて質問が投げかけられるが応えがない。道路交通は混乱しているし、空の便は運休したまま。

「もうすぐサンチアゴに侵攻がはじまる」
叫ぶ声があった。

わたしは何を探しているのだろうか？ どこに行こうとしているのだろうか？ すると、アンテナが肩にか



祖国か、死か

メラを担いでやって来た。わたしは彼をバスに引きずり込んだ。

午後十二時三十分

バスはマルテ広場を出発した。人でいっぱいだが、話し声もしない。運転手は運賃を請求して、その中を苦しそうに移動する。聞こえるのは、乾いた打刻機の音だけ。窓の外には、緑豊かなけしきが流れ、エンジンはカーブするたびに重く大きく呻った。

通りで

みんな、不安げに街角に立っている。労働者は組合ごとに集まり、丘陵の至るところにライフルを構えて身を潜めた。侵攻を食い止める人

垣で、各町には何千人もの人々が武装して構えている。

高速道路は上り下りとも兵士を運ぶトラックの列が途切れない。軍の装備を積んだ大型トレーラーが動員された。彼らは脇に避けたり先を進んだり、バスのあとを追ったりと忙しない。わたしは目に映るもので気を紛らわせようとした。余計なことを考えないで、通りや家々に掲げられた旗を見つめる。人々は通り過ぎる軍隊に敬礼すると、兵士が武器を掲げて応えた。バスの中が、徐々にだが、活気が戻りはじめた。あちこちから、途切れ途切れに話し声が聞こえてくる。さっきまでの沈黙に隠されていたのは何だったのか。恐怖なのか、苦悩なのか、それとも怒りなのか、わからなくなった。不条理なのだが、知りたいと思う。恐怖とは何なのか？

最初の数時間

ペンタゴンによるどうしようもない戦争に対する苦悩を心に抱えたまま、わたしはオルギンに着いた。東部の街は、最初のニュースを発信した。街のあちこちで侵攻の様子が確認される。サンタ・クララだけでなく、高速道路も空爆を受けている。

不快な沈黙が乗客の足を止めた。誰も心を閉じて抗議もしない。わたしは苛立った。

夜更けが迫っている。運転手が告げた。

「噂がほんとうなら破壊工作や爆撃もあるだろう。だから、カマグエイで一夜を明かすことになる」

敵の上陸に対する恐怖が極度に高まり、不安を掻き立てる。けれど、公式な報告がない限り、旅を中止するわけにはいかない。

ラス・ビジャスに入った。活気に満ちた革命の行進曲が繰り返し流されている。それがわたしの焦燥あせりと混乱を鎮めてくれる。まるでアスファルトの上を車輪が弾むはずようなリズムだ。

市民よ、進め、進め、

前進せよ！

なぜか、その歌詞とリズムが心の葛藤を和らげてくれる。

検問に人々は苛立っている。その光景に、かつての暴政の検問を思った。と、上空をビーコン信号を追って戦闘機が飛び交った。

心臓の高鳴りが止まらないまま、サンクティ・スピリトゥスに辿り着いた。もう、警戒は杞憂きゆう

だ。けれど、マタンサスでも激しい戦闘が続いているという。

サンタ・クララ、深夜零時

疲れ果てた獣のようなバスがプラットホームに着いた。年老いた従業員が目深まぶかに帽子を被り、椅子に軋うたな寝ねしていた。それを起こして訊いてみると、黒い服を着た女性を指差した。中年の、肌の浅黒く背の高い、慎重深い服装の人で、プラヤ・ヒロンからやって来たという。

「反逆者たちの行為は犯罪だ」

震える声で涙ながら、彼女は何度も繰り返した。憎悪の波がわたしを襲った。運命を共にし、わが身を差し出したい衝動に駆かられた。ハバナに戻れば危険はないだろう、しかし、……。

そんなわたしの意を察したのか、ジルベルト・アンテはしばらく黙ったあと、わたしをけしかけた

「ヒロンに行こう」

コロン、四月十八日午前三時三十分

ホテル「ハバナ・サンチアゴ」のカフェテリアでは、若い民兵がコーヒーを飲みながら話をし

ている。すらつとした浅黒い肌の青年で、笑顔がいい。よく見ると、時計の鎖に手榴弾をぶら下げている。まだ十八にもならないだろう、先遣隊からやって来たらしい。セントラル・オーストラリアのすぐ近くで激戦が続いていて、重火器を配備する時間がなかったから、ライフルや迫撃砲や機関銃で対抗しているが痛手が大きいという。ただ、敵の戦闘機を数機、撃ち落としているらしい。

そこに、ジルベルト・アンテがやって来た。エンリケ・デ・ラ・オサと電話で交渉したら、彼はわたしたちを従軍特派員に任命することに同意したという。

「ロン、グアレiras、マンギート、午前四時三十分

戦場になったハグエイ・グランデには容易に着けないだろう。ドライバーたちは顔をしかめながらも行くことに決め、約束の場所に用心深く車を停めた。

あたりは真つ暗だ。金星が夜空の片側で震えるように煌めいている。夜が明ける気配は微塵もない。

グアレirasへの道路は穴だらけで、そこを、がた、がた、進んだ。奇妙な静けさに、かえって眠れない。躊躇うのはよくない。わたしは間違はなく戦場に向かっている。そして、恐れて

いる。数時間前に追っ払ったはずのわたしの中の野獣が再び姿を見せた。

何度も検問所に立ち寄りながらグアレイラスを通り抜け、マンギートに辿り着いた。夜明けに、ヤレイとライフルを持った農民を乗せた。ア德拉イダ農場のラモン・メンドーサがわたしたちを迎えた。

「ミサはもうすぐ終わる。侵略者たちは抛り所を失くしている。彼らには理性がない。だから武器も役に立たないだろう。息子は前線にいるが、生死がわからない。ただ、何が起こつても、すべてはキューバのためだから、息子はそれを受け入れるだろう」

彼は農民で、六十八歳になるが民兵のリーダーだった。

敵は戦車と空挺部隊を投入しているらしい。

「そろそろやって来ると思っていた。この一年間、猿のようにライフルを持って職場に行っていた。その猿が、いま、ライオンと戦っている」

歯茎も露わに大きく笑った。

ハグエイ・グランデ、午前六時

町に入ったところで検問に止められた。身分証明書を見せると、



敵機の残骸

「近くでまだ爆雷が続いています」
険しい表情で教えてくれた。

侵攻軍の上陸は昨日の早朝のことだった。セントラル・オーストラリアに駐屯していたシエンフエゴス大隊の民兵がそれに攻勢した。侵攻軍は海岸線からサパタ沼地に点在する小さな村々まで空爆したあと、戦闘部隊がプラヤ・ヒロンとプラヤ・ラルガに上陸し、セントラルからピッグス湾に続く幹線道路を数キロにわたって占拠した。

以来、激しい戦闘が一带で繰り広げられている。ラ・シエナガの住民は避難しているが、湿地帯を逃げ惑っていて安全ではない。爆撃で家屋を破壊され、多数、死者も出ている。

わずかな荷物を大事に抱え、避難を続けている。悲しく、腹立たしい。泥で汚れたバッグや衣類の包

みが散乱し、住居すまいと平和から無残に引き裂かれた人々、子どもを殺された母親が逃げのびてきた。まるで狂人のようだった。わたしたちはすぐに民兵会館に走り、さらにセントラル・オーストラリアの司令部に向かった。

セントラル・オーストラリア、午前九時

例年なら、バティはサフラの最中さなかで、荷馬車の喧騒や作業員の列や機関車の汽笛でこつた返し、高い煙突からは白い煙がもくもくと立ち上り、冷却塔からは滝のように流れる水の音が響いているだろう。

けれど、きょうのバティは収穫のよろこびを知ることなく、だれもがランド銃を構えている。前線から帰還した兵士たち、そして、これから戦闘キャンプに向かう兵士たちでこつた返している。彼らは即席の野戦病院を設け、救急治療を続けている。救急箱は木のベンチの上に置かれている。手術台はテーブルに白いオイルクロスをかけただけの俄にわか造りだ。昨夜、前哨地ではマッチの灯りをたよりに応急処置が行なわれていた。子どもを産むときしか血というものを知らなかった女たちが、いまは恐れることもなく勇気を奮って血を拭い、血でべつとり汚れたベッドカバーを洗い、看護を続けている。

農民の女以外に、夫や子どもや家を捨てて立ち上がり、家族のために戦う者たちの傍そばに駆け寄る者がいるだろうか？

周辺の地域や、わたしたちがやって来た道路には、重火器の大砲が配備され、待ち伏せしたり、前進したりして、そのときを待っている。

敵機は精油所のタンクを破壊しようと繰り返し飛来している。しかし、うち一機はすでに撃ち落とされていた。金髪のパイロットを乗せていた。その残骸はタワーのすぐ近くに転がっている。

プラヤ・ラルガで敵に捕縛されていた建設作業員たちが逃げてきた。涙を抑えきれない者もいれば、話しを止めない者もいる。そして、緊張した様子でトラックの下に寝転がった。戦闘は少し前に終わり、敵はヒロン方面に撤退した。

司令部の前で民兵が動き出した。前線に向かう者は武器を担いで準備している。帰還者はライフルを腰に構えたまま、バックパックを枕に家々の軒先や通りの片隅で眠りこけた。みんな軍服を着ているが、靴職人や学生や料理人や俳優、それに、文学者や鋤山労働者や樵きこりや漁師や製糖工場の労働者たちだ。

司令部は大きな屋敷に置かれていて、内にも外にも、人々が腕を組んで身を寄せ合っている。

暑い、とても暑い。陽光が小川の水面に煌めく。牛乳缶を持ち上げると、白く糸が引いてとろりと流れ落ちた。

さらに増援大隊が到着した。シエンフエゴスの狙撃大隊で、その活躍ぶりは繰り返して語られている。彼らは最初の猛攻と砲撃を身をもって食い止めた。侵攻軍と遭遇したのが午前四時で、夜が明けるまで陣地を守り抜いた。

アブラハム・ゴンサレス・チャビアノはセントラル・ワシントンの民兵隊長だが、戦闘地域から退避する途中、子どもたちでいっぱいトラックが機関銃掃射を浴び、何人も死んでいるのを目撃している。

そういえば、敵の傭兵のパラシュートを切つてスカーフのように首に巻いて火傷を隠していた、あの東部出身の若者はどうしただろうか。そうすることで病院送りを逃れていた。

「今朝の戦闘はほんとうに凄かった。やつらは五十口径の銃と迫撃砲で攻めてきた。われわれは二時から五時まで攻撃に晒されていたんだ」

「われわれのパイロットが敵機を撃墜している。今日、また二機を撃ち落としました。あれは神業だったな」

マタンサスの財政部のリカルド・カストロ（十九歳）と靴職人のフェリペ・クルス、そして、

シエゴ・デ・アビラのネルソン・アルバレスが、昨日の朝、最初の増援部隊のライフル兵といっしよに戦闘に参加した。敵との距離はわずか二百メートルだった。

マタンサス民兵学校と迫撃砲部隊のラファエル・カバジェロとアルベルト・セオアネは、敵機の機銃掃射の中を進撃し、前線を五キロにわたって押し戻した。

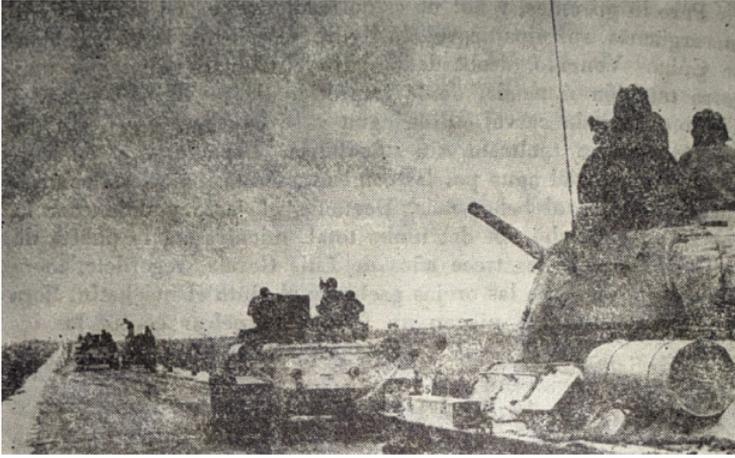
司令部のある建物には、侵略者から押収されたヘルメットやパラシュートが山積みになっている。どれも真新しいものばかりで、アメリカの烙印が押されていた。

アウグスト・マルティネス・サンチェスは、軍用地図の前を行ったり来たりしている。目をぎらつかせ、ぼうぼうの黒髭を撫で回している。司令部の司令官は頭の回転が速い。わたしが一言、訊ねると、素早く答えた。

「侵略者に死を！」

その彼に手短かにインタビューしたあと、戦闘員でごった返す廊下を行くと、重い手がわたしの腕を掴んで引つ張った。驚いて振り返ると、金髪の民兵だった。髪はトウモロコシの毛のようで、目はわたしよりも明るい色をしている。そして、機関銃を片手に、ついて来るよう目配せした。

近くの部屋に入ると、身分証の提示を求めた。戦闘の最中、女が一人で何をしているのか、



前線に向かう戦車

不審に思ったのだろう。CIAは予想もしないところにエージェントを潜ませているから無理もない。わたしの瞳は明るく、髪はブロンドなのだ。わたしは記者証を見せ、事情を説明し、彼の熱意を称賛した。

だれかが捕虜を連行してきた。ヤンキーのパイロットだという。しかし、どう見てもアメリカ人らしくない。そして、パイロットとも思えない。その黒い目、体つき、肌の色は、明確にキューバ人であることを物語っていた。体を丸く竦め、変装をしているつもりなのか、花柄の帽子を被っている。そして、追われた獣のように怯えている。水がほしいというので与えると、息もつかず、がぶがぶ飲んだ。水が口の端を伝ってシャツを濡らしている。そうして、目を閉じると、頭を垂れて崩れ落ちた。

司令部のドアの前で、少年が声を上げて泣いていた。

十三歳になるルイス・ガルシアだった。大きな図体に、腰のベルトにマチエーテをぶら下げている。侵略者と戦うというのにライフルをもらえないのが悔しいらしかった。

午前十時三十分

救急車が機関銃掃射を受けてしまった。担架係と運転手は飛び出して、白旗を掲げた車に移った。そして、敵の攻撃の中を仮設病院に走った。

顔を上げ、エンジン音に耳を澄ませる。砲兵たちが近くで警戒している。作戦地まで行くのは容易でないだろう。車両はみんな軍用に使われている。仕方がない。プラヤ・ラルガに向かう道路の出口に陣取って、やってくる車を待った。五回目の試みで、やっと赤十字のジープをつかまえた。

ピッグス湾への唯一の道路は、両側に、林の茂みに隠れてライフルと大砲の列が延々と続いている。道路は、迫撃砲や、戦闘機の空爆でどこも穴だらけだ。この道路は、武器と兵士を前に運び、救急車も行き来する唯一の幹線道路だから、格好の標的なのだ。

右側を、白い布を風に靡かせながらジープが走り、左側を巨大な黒い戦車が走る。戦車の砲身は前方を指したまま。キャタピラの跡が、砂州に残したアカウミガメの跡のように平行に走っ

ている。

第一縦隊が前進しはじめた。

「空挺部隊に気をつけろ！」

叫びながら通り過ぎる。

胸の鼓動を抑えきれない。

舵を取っているのは、赤十字第六旅団のマヌエル・エスポンダ・アルバレスだった。同じ旅団ハバナ代表のロベルト・ディアス・カレロが同乗している。

「救急車の中で、負傷者が何人か死亡した」

空挺部隊が近くに身を潜め、独立心の強いマスチフ犬のように敵を待ち構えている。草の茂みの中に、銃口を向けた彼らの姿が垣間見える。

「やつらはここまで来たが、われわれは海岸まで追いついた」

白い砂埃が道路を覆い、喉をからからにし、髪や睫毛まで真っ白にする。その中を兵士たちを満載したバスが列をなしてやって来る。前線と前哨基地の増援に向かうのだ。弾薬を満載したトレーラーも走っている。

道路警備にあたっているみんなは、敵から奪ったパラシュートの布で即席のスカーフをつ

くつて首に巻いている。それを、リボンの品評会のように風に靡かせながら敬礼する。ジープを追い越して、救急車や車がヘッドライトを点けて猛スピードで走っていく。

「戦闘機だ！」

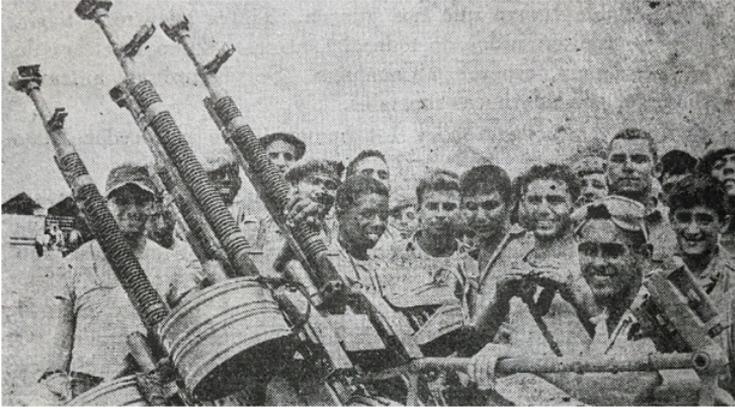
だれかが叫んだ。わずかの数秒が、何世紀にも思えるほどに長い。だが、戦闘機ではなかった。

われわれは前進した。道路端の木々は榴散弾にやられて吹っ飛び、救急車も数台、車輪を宙に浮かせたまま土手の溝に突っ込んで黒焦げになっている。その中に、腕と握りしめた拳こぶしが覗いていた。

グランマ基地の砲兵といっしょに

祖国が脅威にさらされたことで、英雄たちの記憶が蘇よみがえった。女たちは男たちとともに戦うために子どもを産み育てる。そして、血と苦悩を代償に勝ち取ったものを脅かすものとの戦いの中で、その子どもたちも、また勇者になる。

ソプリジャールの近郊では、少年たちが対空機関銃を構えて守備にしていた。彼らはピナール・デル・リオのグランマ基地からやって来た。みんな、はじめて武器を手にしたのだった。



少年砲兵隊

ほとんどが十三から十五歳の子どもたちで、年長でも十七歳にしかならない。噓せ返るような暑さの中で、痩せた胸も露わに、細い首に種のネックレスを付けている。額も顔も汗びつしよりで埃まみれで真つ白だ。挨拶の仕方や言葉遣いも子どもそのまま、カメラの前に寄って来て、指で髪を梳かしながら笑顔を振りまく。

最年少の砲兵だった。胸にハート型のロケットをぶら下げている。きつと恋人なのだろう、小さな写真に女の子が微笑んでいた。

忘れてはならないこと

静寂の中を何キロにもわたって道が続いている。赤と白の旗を掲げた車が次々と通り過ぎていく。砂塵すなぼこりが巻き上がる。それが、やがて重くゆつくりと降り注ぎ、すべてを覆い尽くす。



ここには炭焼き職人の家があった

最初に爆撃された村々が姿を見せた。まだ、煙がくすぶっている。そこには炭焼き職人の家があったらしい。クレーターが大きく口を開け、底には、家財や椅子やベビーベッドや炊事道具の残骸が散乱している。これを無惨に放つておいてはいけない。

前線で

プラヤ・ラルガに急いだ。いよいよ前線だ。戦車が五両、前を疾走している。若い兵士たち、間違いなく東部から来たと思うが、黒いヘルメットの陰に赤褐色の顔を覗かせている。

ゴンサロ・アルバレスは、医療部隊に所属している応急処置所の責任者で、数時間前にプラヤ・ラルガから避難したときに敵から奪った大量の注射器や包帯やサルファ剤のほか、いろんな薬の瓶を見せてくれた。



彼はもう故郷の空を見ることができない

侵攻は、アメリカ軍が綿密に準備していたことは明らかで、本格的な上陸作戦だった。戦車はもちろん潜水士まで送り込んでいる。

最前線との間は危険がいっぱいで、歩みも遅く、迫撃砲やそのほかの攻撃を避けながら進む。何百もの手榴弾やTNTの入った弾薬箱が置き去りにされていた。

道路にはいろんな口径の葉莢が散乱して、迫撃砲の大きな丸いクレーターがいくつも大きな口を開けている。戦闘の傷痕が生々しい。激しさを肌で感じる。道路端、草の茂みやその向こうにも死体がいくつも横たわっていた。

ジープはカレトンの分岐点から海岸に抜けていく。側溝の脇には、弾薬を満載したトラックや戦車が壊れたまま動かないが、五十口径の機関銃も備わっている。これに対抗するのは苦しかっただろう。傍には、アメ

リカ政府から支給された戦闘服を着た侵略者の死体が二つ、死蠅に覆われていた。一人は、傍に潰れた小型の弾薬箱に手をかけている。

目を背けず、じつくり見た。まだ幼い顔をしている。肢体は硬直し、目は大きく見開いたまま。もう故郷の空を見ることもできないだろう。栄光も希望もなかった彼らの冒険は、当然の結末を迎えた。その名は、マングローブの茂みの陰に、少しの尊厳も涙も得られないまま、忘却から救われることもないだろう。わたしは心を鬼にし、冷たく硬直した彼の手を弾薬箱から引き下ろし、弾薬箱をトロフィー戦利品にした。

ブラヤ・ラルガで

「そこを渡つてはいけない、地雷があるかもしれない」

地雷はないように見えても、進むにつれ、何百もの不発弾に遭遇した。遠く、鈍い大砲の轟音と炸裂音が響き渡る。迷彩服を着た死体はさらに増え、周りを蠅の群れが飛び回る。

侵略者を追い返すためにやって来た民兵は、ジープやバス、戦車やトラックで、砂浜や岩礁の遊歩道に繰り出し、覆い尽くすほどの大群になっている。そして、ヒロンに続く道を進んでいる。



備兵たちが上陸に使ったモーターボート

青い海、穏やかに波が打ち寄せる。その砂浜に上陸用ボートやランチが打ち捨てられている。舷側には海賊のような髑髏どくろが描かれていた。

砲台の近くでは、少年砲兵たちが敵の戦闘機に攻撃を仕掛けている。

双眼鏡で覗くと、キューバ空軍によって無力化された「ヒューズトン」が近づいてくる。

海に突き出た崖の上にぼつんとある小屋は前哨基地で、十代の少年が会釈で迎えた。明るい丸顔の人懐っこい金髪青年で、第十八砲台の砲兵だ。絶えず旋回して攻撃してくるB二六を撃ち落としたいらしい。

「簡単だよ。多連装砲か三十七ミリ機関砲なら、一発で撃ち落とせる！」

彼、ラサロ・ケサダは嘯うそぶいた。

「敵機だ！」

だれかの叫びに、プラヤ・ラルガが動き出した。

砲兵たちが攻撃に備える。

「爆撃だ！ 小屋まで逃げろ、コンクリートの下に伏せるんだ！」

ラサロが叫んだ。

地平線に一点が現われたと思ったら、瞬く間に大きくなった。弾丸のように一直線に迫っては、胴体と翼を十字に描いて頭上を走る。怒り狂ったシュモクザメのようだった。

瞬間、わたしは腕を後頭部に組んで地面に伏せた。と同時に、対空砲と五十口径の機関砲が對抗した。恐る恐る頭を上げた。目の前に、猛禽獣のような戦闘機が低空飛行で迫ってくる。エンジンの轟音が耳をつんざく……。

最期かと思った、そのときだった。どういうわけか、あの本が脳裏に浮かんだ。キューバの人々の惨めな生活や古臭い制度や政府の腐敗とアメリカ従属を暴いてカサ・デ・ラス・アメリカス賞を受賞した、その本で、家族の顔ではけっしてなかった。

炎の幕に弾かれ、敵機は遠ざかった。

ラサロは優しく抱き起こしてくれた。そして、ハンカチで衣服の埃を払ってくれた。つい



アメリカ軍が放棄していった武器

さっきまでわたしが想像していたことを彼は思いもしなかっただろう。わたしはそれを話した。彼は笑った。

「あんな爆弾が落ちてきても、このシェルターならへっちゃらさ」

叫びが聞こえる。そのたびに、みんなは警戒を強めた。また、エンジンの轟音がロケット弾のように大きな音を立てて通り過ぎていく。隣に負傷した戦闘員がいた。シャツの左肩あたりに黒くべつとり染みが広がっている。なのに、彼は手でそれを隠そうとする。負傷兵として後方に戻されたくないのだろう。

夜が明けた。慎ましい風貌の男が、わたしを探しているのか、歩いてくる。中肉中背の黄色い顔、灰色の髪に粗末な帽子を被っている。握手に差し



機銃掃射にやられた農婦

出したその手は視線と同じに冷たかった。

昨日の朝、八時頃だったらしい。彼の妻と長女が、ほかの負傷した子どもたちを連れて避難場所を探しに行った。ところが、カレトンカーブに着いたところで敵機の機銃掃射を受けた。白い布切れを振っていたというのに。娘たちは助かったが、妻はやられた。彼が見つけて抱き起すと、彼女は長女にいったらしい。

「泣くんじやない。民兵隊から離れちゃだめよ、これはわたしたちの戦いなんだから」

ひとまず、彼は妻を砂の中に埋め、戦闘が終わるのを待った……。

彼は、侵略者が置いていった歴史の証言として、彼女を世界に示したいらしい。わたしは黙ったまま、彼のあとを追った。彼はそこを見定めると、静かに砂を掘りはじめた。そして、粗末な棺にやさしく納めた^{おさ}。

遠くで砲弾が炸裂する音がした。